

# 阿波忌部の考古学的研究

学芸員 天 羽 利 夫

## はじめに

「忌部」に関する研究は、津田左右吉博士をはじめとして多くの学者によって取り組まれてきた。この研究の重要性は、忌部が中臣氏とともに古代朝廷祭祀に携わっていたことから、古代祭政に関しての一面と、伴造として各地域の部民をいかに収収していたかという、いわゆる「部民制の研究」の課題をもっていると思われる。後者は、大化前代の国家権力が各地域の支配体制を整えていく過程を究明するうえで、きわめて重要な研究課題といえる。

近年、上田正昭氏の研究によって、忌部の研究は大きな業績を得た。しかし、現状でみるかぎり、各地域におかれた忌部に関しては、もはや史料の限界から解明されない多くの問題を残している。たとえば、部の設置時期や範囲、各地域の部民の出自や性格、などがあげられるであろう。本稿は、本県にかかわりのある「阿波の忌部」について、こうした問題点を考古学的に究明しようとするものである。

この研究は、徳島県博物館が昭和45年度から実施している一連の遺跡調査の成果である。とくに本稿で述べようとする仮説は、51年度より3ヶ年計画で始めた、麻植郡山川町忌部山所在の「忌部山古墳群」の発掘調査によって生まれたもので、同年11月に開催した「阿波の忌部氏展」でその一部を発表しておいた。

なお、調査を実施した遺跡の報告書、ならびに特別展にちなみ刊行した小冊子に次のものがあるので参照されたい。

拙著「徳島県下における横穴式石室の一樣相」『徳島県博物館紀要』第4集 1973年3月

拙著「徳島県下における横穴式石室の一樣相—その2—」『同上書』第8集 1977年3月

徳島県博物館編『阿波の忌部氏』 1977年3月

本稿執筆にあたり、岡山真知子氏には資料整理や図版作成をしていただいた。またつぎの方々にはご教示や資料提供、文献の複写などでご協力を賜わった。明記して厚く御礼申し上げる次第である。

赤星正計、石野博信、石丸洋、一山典、猪熊兼勝、岩永省三、上田正昭、植田法彦、江崎武、岡本健児、大野嶺夫、置田雅昭、小沢一弘、賀川光夫、河上邦彦、川西宏幸、小池史哲、小林勝美、佐田茂、潮見浩、志間泰治、島巡賢二、下条信行、新孝一、神宮文庫、菅原康夫、菅谷文則、高倉洋彰、田辺征夫、長井数秋、西谷正、林博道、福尾正彦、正岡睦夫、松本豊胤、丸山竜平、六車恵一、水野正好、村田文夫、森醇一郎、吉見哲夫、渡辺誠（敬称略、五十音順）

# 第1章 忌部をめぐる諸問題

## 1 中央忌部について

『新撰姓氏録』をみると、右京神別上に「斎部宿禰 高皇產靈尊子天太玉命之後也」とある<sup>註(1)</sup>。つまり忌部氏は天太玉命の神裔氏族として位置づけがなされている。遡って『日本書紀』には「忌部遠祖太玉命」や「忌部遠祖太玉者造幣」とあり、また「忌部首遠祖太玉命」とみえる<sup>註(2)</sup>。『古事記』にも「布刀玉命者、忌部首等之祖。」とある<sup>註(3)</sup>。『紀』、『記』に共通して、忌部首の祖は太玉命とし、本来首姓であったとしている。

忌部氏が首姓であったことは、『日本書紀』によってうかがえる。大化元年7月、蘇我石川麻呂の建儀によって、供神の幣を課徴するため派遣された忌部首子麻呂は、首姓である<sup>註(4)</sup>。また、天武天皇元年7月、壬申の乱で荒田尾赤麻呂とともに倭の古京を守った忌部首子人（忌部首子首と同一人）も同じく首姓である<sup>註(5)</sup>。そして、忌部首子首は天武天皇9年正月、はじめて連姓を賜わっている<sup>註(6)</sup>。さらに同13年12月、忌部連は伴連らとともに宿禰姓を賜わっている<sup>註(7)</sup>。つまり天武朝になって、連姓、宿禰姓となったことが知れる。

中臣氏など多くの伴造が連姓、造姓であるのに対し、忌部氏が首姓であるという特異性は、かねてより論議をかもすところであるが、上田正昭氏は次のように理解している。

「部十首姓は、東国よりも畿内、西国に多く、北陸、東国、坂東、九州に少ないという帰納的結果がみられるからである。首姓はより直接的に在地を支配する形態を示し、中央忌部の場合も、たんに連姓より下位であったという常識的理解にたつよりも、それが首姓伴造であることは、より内廷との関係が直接的隷属性をもったことによると解すべきであると思われる。」<sup>註(8)</sup>

つぎに忌部氏の職能について、上田氏は大化前代の場合、神事（祝詞・ト占・御幣など）のほか、軍事と宮殿造営などとも強いつながりのあることを指摘している。また令制下では、一つは大嘗会の際に神璽の劍鏡を奉持して祭儀に参加すること、二つは伊勢奉幣使としての役割、三つは大殿祭、御門祭の主たる執行、の3点を上げている<sup>註(9)</sup>。これらの職能を遂行するためには、次節で述べる各地域においた部民との関係が重要になってくる。

ところで、忌部氏の本貫は、大和高市郡金橋村にあったとする上田説が有力である<sup>註(10)</sup>。『延喜式』神名帳に式内社太玉命神社が存在すること<sup>註(11)</sup>、同所が現橿原市忌部町として地名が残っているところなどから妥当な説と考えられる。ただ、『和名抄』には郷名が見当たらない点、留意しておきたい<sup>註(12)</sup>。この地から紀の川を下れば、紀伊の忌部、ひいては南海道に位置する阿波、讃岐の忌部へと道は通じる。このようにみると忌部の本貫は地の利にかなった位置にあるといえる。

つぎに忌部氏の出自について考えてみたい。今まで、忌部氏といえば神裔氏族として大方片づけられてきた。もっとも、史料の限界からすれば当然であったといえるが、ここに大林太良氏の説を紹介しておきたい<sup>註(13)</sup>。

大林氏は、『古語拾遺』を読んで感じることは忌部氏が渡来人集団と相当密接な関係をもっていたのではないか、という疑問から出発する。その理由の一つは、同書のみずかな紙数の割合に渡来人関

係の記事が多いということ。同書は忌部氏の権利を主張した書物であるにも拘らず、忌部氏の祖の事蹟は神代より崇神朝に関してのみ具体的に記されたにとどまり、それ以後の時期、ことに応神から雄略に至る時期、つまりいわゆる応神王朝に相当する時期は、もっぱら渡来系諸氏族の事蹟をもって埋めていること。第二は、『古語拾遺』の記事によれば、忌部氏は三蔵の管理という職務において、渡来系諸氏族と共通するところがある点である。ここで重要なことは、同書の三蔵の記事が史実であるかどうかというのは問題ではなく、三蔵のうちの内蔵・大蔵が、秦氏、東・西の文氏、漢氏のような渡来系諸氏族の管理するところと並んで、忌部氏も、三蔵の一たる斎蔵を管理して来たと主張していることである。つまり、忌部氏の伝統的職能の一つは、彼等自ら主張するところによれば、渡来系諸氏族と共通の職能、つまり蔵の管理があったことである。第三は『古語拾遺』に、太王命が天日鷲命ほか諸神を率いてたとされるが、このことは、これらの神々、つまり工芸の専門家たちを中央忌部氏が統轄していたことであり、応神朝以降『日本書記』にしばしば述べられているような渡来技術者集団の管理を想起させる。第四は、中央忌部の本貫とされる高市郡は、朝鮮渡来人系住民が集団的に住んでいたところであること。『古語拾遺』の書かれる直前の時代には、東漢氏が断然圧倒的な地位を占めていたこと。

以上のような点から、大林氏、中央忌部氏が渡来集団ときわめて密接な関係にあったこと、また地方の忌部についても渡来系技術者集団の可能性を秘めていることを指摘している。

このことに関連して、上田氏の指摘を思い起こす。上田氏は『日本神話』のなかで、「中央忌部氏に属した忌部の分布のもっとも濃厚な地域は、出雲・筑紫・讃岐・阿波・紀伊・安房などである。それらの地域をつなぐルートは、陸上の道だけでは理解できない。出雲や九州四国・紀伊半島・房総半島などの脈絡には、黒潮のかおりがただよう。血液型の分布においても、太平洋岸には南方とのつながりのふかいO型が多いとされているし、紀伊半島と房総半島の地名には共通するものが少なくない。」と述べている<sup>註(14)</sup>。この見解に注目して大林氏は、『古語拾遺』には海洋的香気が稀薄であるとし、その理由として、同書には地方忌部独自の神話的伝承はほとんど入っておらず、中央忌部の立場で著わされたもので、中央忌部の本貫が内陸部であるから海洋的香気が薄いのも不思議ではないと理解して、自説と上田氏の見解に矛盾はないものと判断している<sup>註(15)</sup>。

筆者は、大林氏の忌部氏が渡来集団にかかわりがあるという説に多くの示唆を得た。後述するように、本稿の目的も、地方におかれた忌部とはいかなる集団であったか、とくに阿波の忌部について考察することにある。

## 2 地方忌部の実体

史料に登場する地方の忌部は、紀伊、讃岐、阿波、出雲、越前、筑紫、伊勢、安房などにみられる。『日本書紀』は「即以紀伊国忌部遠祖手置帆負神為作笠者。彦狹知神為作盾者。天目一箇神為作金者。天日鷲神為作木綿者。櫛明玉神為作玉者。乃使太玉命以弱肩被太手織。而代御手以祭此神者始於此矣。」<sup>註(16)</sup>と各忌部の役割を述べている。こゝで具体的に国名を記してある忌部は、紀伊国だけである。天日鷲神については、同書宝鏡開始段で「下枝懸以粟国忌部遠祖天日鷲所作木綿。」<sup>註(17)</sup>と

前出するところから、阿波の忌部であることが明らかである。『日本書紀』で明確に記された地方忌部は、紀伊、阿波の二国だけということになる。

『古語拾遺』では、地方忌部をどのようにとらえているのであろうか。主要な部分を抜き書きしてみる。

『又、男の名を、天太玉命と曰す〔斎部宿禰の祖也〕。太玉命の率たる所の神の名を、天日鷲命〔阿波国の忌部等が祖なり〕、手置帆負命〔讃岐国の忌部の祖也〕、彦狹知命〔紀伊国の忌部の祖也〕、櫛明玉命〔出雲国の玉作の祖也〕、天目一箇命〔筑紫・伊勢両国の忌部の祖也〕と曰す<sup>註(18)</sup>。

#### 中略

仍て天富命〔太玉命の孫なり〕をして、手置帆負・彦狹知二神の孫を率て、斎斧・斎鉏を以て、始めて山の材を採りて正殿を構立つ。所謂底都磐根に宮柱ふとしり立てて、高天原に搏風高しり、皇孫命の美豆の御殿を排、造り奉仕也。故に、其の裔、今紀伊国の名草郡御木・鹿香二郷に在り〔古語に正殿、之を鹿香と謂ふ〕。材を採る斎部の居る所、之を御木と謂ひ、殿を造れる斎部の居る所、之を鹿香と謂ふ、是其の証也。

又天富命をして、斎部の諸の氏を率て、種々の神宝・鏡・玉・矛盾・木綿・麻等を作らしむ。櫛明玉命の孫は、御利玉〔古語、美保伎玉。祈祷を言ふ也〕を造れり。其の裔、今出雲国に在り。年毎に調物と共に其の玉を貢進る。天日鷲命の孫、木綿及び麻并に織布〔古語、阿良多倍を造れり。仍て天富命をして、天日鷲の孫を率て、肥饒地を求めて阿波国に遣はして、穀・麻の種を殖ゑしむ。其の裔、今彼の国に在り。大嘗の年に当りて、木綿・麻布、及び種々の物を貢る。以に郡の名を麻殖と為る縁也。〕

天富命、更に沃壤を求ぎて、阿波の斎部を分ちて東土に率て往かしめ、麻・穀を播し殖ゑしむ。好き麻の所生、故之を総国と謂ふ。穀木の所生、故之を結城郡と謂ふ〔古語、麻を之総と謂ふ。今上総・下総二国と為す、是也〕。阿波の忌部の居る所、便ち安房郡と名く〔今安房国、是也〕。天富命、即ち其の地に於て太玉命の社を立つ。今之を安房社と謂ふ。故に其の神戸に斎部氏有り。又、手置帆負命の孫、矛竿を造れり。其の裔、今分れて讃岐国に在り。年毎に調庸の外に、八百竿を貢る、是、其事等の証也。』<sup>註(19)</sup>

以上が、『古語拾遺』にみえる地方忌部の全容である。『古語拾遺』が、ほぼ『日本書紀』の故事をそのままうけつぎ簡略化して成立しているという指摘どおり<sup>註(20)</sup>、この記述も前述の『日本書紀』の内容を根幹としていることがわかる。『古語拾遺』の場合、忌部氏の由来を重視していることから、肉付が大幅になされていることは当然であろう。

この両者の記述を比較してみると、『紀』では不明であった諸神と地方忌部との結びつきが理解できる。しかし、『古語拾遺』には祖神について混乱がみられる。引用しておいた前文では、手置帆負命は讃岐忌部の祖とし、彦狹知命を紀伊忌部の祖とする。後文をみると、紀伊忌部の祖神は手置帆負命と彦狹知命の二神とし、手置帆負命が分れて讃岐忌部となったとある。先に引用した部分以外に、『古語拾遺』のなかには「手置帆負命・彦狹知二神をして天御量〔大小斤の雑の器等の名〕を以て大峽・小峽の材を伐りて瑞殿〔古語、美豆能美阿良可〕を造り、兼ては御笠と矛盾を作らしむ。」<sup>註(21)</sup>と



あり、この二神はたえず一体となっている。『日本書紀』では、手置帆負命は紀伊忌部の遠祖としている。津田説は、手置帆負命は書紀の完成前にすでに存在していたものが、後に改変されたからだ<sup>註(22)</sup>、とする見解が正しいのであろう。

ところで、『古語拾遺』にみられる地方忌部のうち、筑紫・伊勢・安房の忌部については、後に付会したものであるという津田説<sup>註(23)</sup>が正しいとされている。津田説は、安房忌部について「地名のアハ（阿波・安房）が同音であるのと、フサ（総）とアサ（麻）と、またユフキ（結城）とユフ（木綿）と、音が類似してゐるのだから附会した説話であって、それは記紀や風土記などに極めて例の多い地名説話の性質を有するものであると共に、此の二地方を忌部氏の勢力範囲であったかの如く説きなさんがために作られたものである。」と説く。

また筑紫、伊勢の忌部について津田説は、太宰府と伊勢神宮とに忌部の部下がいたためであろうとする。太宰府の主神は朝廷に於ける神祇官の地位に当り、其の職務を小規模に行うものであるから、祭祀の事務に服するものとして中臣忌部の部下がそこに配置されていたとする。伊勢神宮にも中臣忌部二氏の部下があったことは疑が無く、神祇式の所々にそのことが見え、特に神宮造宮に関しては、朝廷の宮殿の建築と同様、忌部が特殊の地位を有していたらしいことがみえると述べている。そして、筑紫・伊勢の忌部の祖神を天目一箇命としたのは無意味であるとする。なぜなら、天目一箇命は刀剣製作者として語られるものであるから、太宰府や神職の地位にも職掌にも何等の関係が無い、とみるのである。

津田説にしたがうと、部民としての地方忌部は、伊勢・筑紫・安房を除く、紀伊・讃岐・阿波・出雲・越前の忌部ということになる。そのうち越前の忌部については、奈良時代の唯一の史料<sup>註(24)</sup>によるものであり、それが大化前代に遡りうるかは、今後の検討をまたなければならないであろう。

それでは、忌部氏と地方忌部はどのような関係にあったのであろうか。津田博士はつぎの主な三点を上げている<sup>註(25)</sup>。その第一は、朝廷に特殊の地位と職掌とを有する伴造の家が、地方に於いてそれに隷属している部下を有っていて、その部下のものは主家と同じ氏の名を称していたこと。第二は、それらが主家と同じ職業のものではなかったこと。第三は、それらが主家と血族を同じくするものではなかったこと。

つまり、地方に於いて忌部の名を冒していたものは忌部氏の部民であって、本来、主家に租税を収め其の労役に服していた農民である。ただその農民の間に首領だった有力なものがあって、そういう少数のものが直接に忌部氏と交渉をもち、その部下として、主家の職掌に必要な事務を処理したのであろうと述べている。ここで重要なことは、津田説は地方部民と主家との交渉を部民の首領がはたしたとみていることである。

上田氏は、中央忌部と地方忌部の関係を二つのタイプに分けとらえている<sup>註(26)</sup>。

A型 紀伊のように直接中央忌部氏の管掌下にあつて貢納、上番するタイプ

B型 阿波・讃岐のように国造を介して貢納するタイプ

上田説の意義は、部民の貢納品を取収する過程で国造介在の有無を指摘したことであり、このことによって具体的に忌部の実体を究明したといえる。

以上、本稿に関係をもつ問題点を中心に今までの研究の要約をすすめてきた。これらの研究成果をふまえながら、以下阿波忌部について論をすすめていきたい。

- 註(1) 佐伯有清『新撰姓氏録の研究』本文篇 吉川弘文館 昭和37年 230頁  
註(2) 『日本書紀』前篇 新訂増補国史大系 吉川弘文館 昭和49年  
引用文 卷一 神代上(宝鏡開始本文, 同一書第二、同一書第三) 32頁, 35頁, 37頁  
註(3) 『古事記』上巻 日本古典文学大系 岩波書店 昭和43年 126~129頁  
註(4) 『日本書紀』後篇 新訂増補国史大系 吉川弘文館 昭和51年 卷廿五 219頁  
註(5) 同上書 卷廿八 319頁  
註(6) 同上書 卷廿九 352頁  
註(7) 同上書 卷廿九 374~375頁  
註(8) 上田正昭『日本古代国家論究』 塙書房 昭和43年 210頁

なお、吉田晶氏は首姓をつぎの三つの類型に分けてとらえている。第一は、部民制初期のトモノミヤツコにみられるもので、海部首、山部首、忌部首などがその例で某部+首と称するもの。忌部首のように中央のトモノミヤツコとして地方の部氏の統率者である例もあるが、一般的には地方に居住して所在の部民を統轄支配する。彼等と部民との間には氏族制的な私的な隷属関係が存在し、首を称するものは所在の農民の族長的な地位にあった地方の有力者である場合が多い。

第二は、特に帰化人の後裔にみられるもので、西文首、馬飼首、韓鍛冶首などがその例である。第一類型の私的な関係よりもむしろ専制国家における官僚的の職掌上の地位によってオビトのカバネを得ていたと見る。職掌名+首をその氏姓とすることが特徴である。

第三は、地名+首を氏姓とするもので、ミヤケの管掌者としての地位をしめるのが一般的である。この類型の出現は特に五世紀以後のこととみられるが、ミヤケの管掌者としては必ずしも首のみをカバネとするものではない。地名+首の氏姓がミヤケの管掌者の氏姓となったのは六世紀以後であるように思われる。

吉田晶「カバネ「オビト」について」『国史論集』一 京都大学文学部読史会 昭和34年 145~146頁

- 註(9) 上田正昭『日本古代国家論究』前掲書 199~202頁  
津田左右吉博士は、「忌部氏の職掌は幣帛を取扱ふことと、神璽の鏡剣を捧持することと、宮殿の祭祀に関与することとの、三つであった」と述べている。  
津田左右吉「古語拾遺の研究」『日本古典の研究』下 岩波書店 昭和25年 467頁  
註(10) 上田正昭『日本古代国家論究』前掲書 198頁  
註(11) 『延喜式』前篇 新訂増補国史大系 吉川弘文館 昭和50年 194頁  
神名上に、大和国高市郡五十四座のうち「太玉命神社四座並名神大。月次新嘗。」を見い出す。  
註(12) 池辺彌『和名類聚抄郷名考證』 吉川弘文館 昭和41年  
高市郡内には「巨勢 波多 遊部 桧前 久米 雲梯 賀美」の郷名がみえ、忌部郷はない。  
註(13) 大林太良「古語拾遺における神話と儀礼」『古語拾遺』 新撰日本古典文庫4 現代思潮社 昭和51年 257~261頁  
註(14) 上田正昭『日本神話』 岩波新書 昭和45年 215頁  
註(15) 大林太良 註(13)に同じ 256頁  
註(16) 『日本書紀』前掲書 引用文卷二神代下(天孫降臨 一書第二) 74頁  
註(17) 『日本書紀』前掲書 卷一神代上(宝鏡開始 一書第三) 37頁  
註(18) 安田尚道・秋本吉徳校注『古語拾遺』前掲書 26頁  
註(19) 同上書 75~80頁  
註(20) 同上書 9~13頁  
註(21) 同上書 33頁

- 註(22) 津田左右吉「古語拾遺の研究」 前掲書 511～513頁
- 註(23) 津田左右吉 同上書 安房忌部については481～484頁，筑紫・伊勢忌部については513～514頁に詳述されている。
- 註(24) 天平神護2年の越前国司解に「越前国足羽郡上家郷戸主忌部枚人，忌部大倉」などの名がみえる。  
『寧楽遺文』下巻 東京堂出版 昭和52年 667, 676, 678頁
- 註(25) 津田左右吉「上代の部の研究」『日本上代史の研究』 岩波書店 昭和22年 2頁
- 註(26) 上田正昭『日本古代国家論究』 前掲書 203頁

## 第2章 阿波の古代氏族分布

### 1 史料にみる氏族分布

阿波における古代の氏族分布の実体はどのようなものであったのか、まずこのことから始めてみよう。それによって、阿波忌部の位置づけが可能と考えるからである。筆者が今まで収集しえた史料から集成してみると、つぎのとおりである。

第1表 阿波の古代氏族分布一覧

氏	姓	身 分	所 在 地	年 代	出 典
千波足尼	栗国造	栗名方郡大領	栗名方郡	輕嶋豊明御世	先代旧事本紀 卷10
栗凡直弟臣	正六位下①	采女	板野	養老7年	中王子神社墓碑
栗凡直若子	采女	采女	板野	天平17年正月7日	続日本紀 卷16
栗直若子	采女	采女	板野	天平勝宝4年4月7日	大日本古文書 卷12
栗国造若子	采女	采女	板野	“ 5年5月7日	“
板野命婦	命婦	命婦	板野	“ 3年6月8日	“
“	“	“	板野	“ 4年正月22日	大日本古文書 卷13
“	“	“	板野	“ 5年5月1日	大日本古文書 卷12
“	“	“	板野	“ 5年5月5日	“
“	“	“	板野	“ 6年12月13日	大日本古文書 卷4
“	“	“	板野	天平宝字8年9月4日	大日本古文書 卷16
真浜女	評督	評督	板野	天平19年頃	平城宮木簡 1
凡直麻呂	近衛大初位下	近衛大初位下	阿波国板野郡	神護景雲元年3月16日	続日本紀 卷28
栗道足②	正六位上③	正六位上③	阿波国	宝龜7年6月8日	続日本紀 卷34
栗凡直国継	外從五位下行明法博士	外從五位下行明法博士	阿波国板野郡	宝龜11年12月25日	寧楽遺文 中卷
栗凡直豊穂	“ ⑤	“ ⑤	“	延暦2年12月2日	続日本紀 卷37
栗凡直鱒麻呂④	中宮舍人少初位下	中宮舍人少初位下	“	貞観4年9月23日	三代実録 卷6
栗凡直鱒麻呂	大僧都	大僧都	“	“ 10月14日	“
栗凡直貞宗	“	“	“	“ 9月23日	“
傳燈大法師⑥	長国造	長国造	長国	弘仁2年6月6日	日本後紀 卷21
韓背足尼	郡領	郡領	阿波国勝浦郡	志賀高穴穗朝御世	先代旧事本紀 卷10
長費人立	“	“	“	宝龜4年5月7日	続日本紀 卷32
長直枚	節婦⑦	節婦⑦	“	貞観13年閏8月4日	三代実録 卷20
栗国忌部	県主	栗国麻植	栗国麻植	天平4年10月	日本書紀 卷1
忌部首玉代	戸主	麻植郡川島郷少楮里	麻植郡川島郷少楮里	天平神護元年正月7日	中臣宮處氏本系帳
忌部為麻呂	從五位下⑧	從五位下⑧	阿波国麻植郡	神護景雲2年7月14日	寧楽遺文 下卷
忌部毘登隅	從五位上	從五位上	阿波国麻植郡	“	続日本紀 卷26
忌部連湊美⑨	從七位下	從七位下	“	“	続日本紀 卷29
忌郎連方麻呂⑩	大初位下	大初位下	“	“	“
忌部越麻呂⑪	阿波国麻植郡	阿波国麻植郡	阿波国麻植郡	光仁天皇御世	日本靈異記
忌部連板屋	“	“	“	“	“
忌部首多夜須子	節婦	阿波国名方郡	阿波国名方郡	貞観7年11月2日	三代実録 卷11
忌部首真貞子	傍吏少領	三好郡	三好郡	寛治4年10月9日	徳島県史 卷1
忌部近光	戸座	阿波国	阿波国	天平3年6月24日	類聚三代格 卷1
中臣部	戸座	“	“	“	“
壬生	“	“	“	“	“

木 述 理 物 部 小 龍		阿 波 国 阿波国阿波郡秋月郷	慶雲元年6月15日 6 A D C — S D	続日本紀 卷3 平城宮発掘調査出土 木 簡 概 報 6
男 狭 磯 阿 曇 部 海 部 馬 長 海 部 ? 海 直 豊 宗 <sup>②</sup> 海 直 千 常 <sup>③</sup> 安曇部粟麻呂 <sup>④</sup> 安曇百足宿称	海 戸 人 戸 座 戸 主 從 八 位 上 外 少 初 位 下 正 六 位 上	阿 波 国 長 邑 阿 波 国 阿波国板野郡井隅郡 阿波国板野郡牟屋 阿波国名方郡 " "	允恭天皇14年9月 天平3年6月24日 天 平 19 年 頃 " 貞観6年4月22日 " 貞観6年8月8日	日 本 書 紀 卷13 類聚三代格 卷1 平城宮木簡 1 " 三代実録 卷8 " " 卷9 "
波 多 部 足 人 秦 人 豊 日 服 部 志 止 襦 錦 部 志 止 襦	戸 主 戸 主	阿波国板野郡井隈郡 " 阿波国板 匚 阿波国名方郡新嶋莊	天 平 19 年 頃 " S K 3 3 0 5 土 墳 天平勝宝8年11月5日	平城宮木簡 1 " " 2 大日本古文書 卷4
佐 伯 部 佐 伯 直 仕 直 淨 宗 <sup>⑤</sup> 佐 伯 為 任	少領外從八位上 田取書主大判官代	阿 波 阿 波 阿波国三好郡 "	景行天皇51年秋8月 貞観12年7月19日 寛治4年10月9日	日 本 書 紀 卷7 新撰姓氏録 三代実録 卷18 徳島県史 1卷
漢 人 村 主 漢 人 比 呂 漢 人 大 万 呂 " " 漢 人 根 万 呂 酒見君奈良万呂	戸 主 右 勇 士 衛 火 頭 左 勇 士 衛 火 頭 戸 主 戸 口	阿 波 阿波国那賀郡太郷 " 安波国長郡大野郷 "	天平宝字5年2月22日 " 天平宝字5年2月23日 天平宝字5年3月3日 天平勝宝2年4月4日 "	坂 上 系 図 大日本古文書 卷15 " " " 大日本古文書 卷25 "
百 濟 牧 夫 百 濟 部 前 守 百 濟 部 広 浜 <sup>⑥</sup> 百 濟 岑 子 女	戸 主	阿波国那賀郡原郷 " 阿 波 国 阿波国板野郡	6 A L G — S D 5788 " 弘仁2年4月26日 貞観7年12月9日	平城宮発掘調査出土 木 簡 概 報 6 " 日 本 後 紀 卷21 三代実録 卷11
棕 部 夏 影 <sup>⑦</sup> 棕 部 吉 麿 <sup>⑧</sup> 棕 部 安 成 <sup>⑨</sup>	從 七 位 上 從 八 位 上 從 八 位 下	阿波国那賀郡 " "	元慶5年4月4日 " "	三代実録 卷39 " "
脚 咋 別 勝 間 粟 人		阿 波 国 "	履中天皇6年2月	日 本 書 紀 卷12 阿波国風土記逸文

- ① この時、外從五位下賜う。 ② この時、直姓賜う。 ③ この時、時国造賜う。  
 ④ この時、粟宿称賜う。 ⑤ この時、大判事為、明法博士故如し。 ⑥ 俗姓凡直という。  
 ⑦ この時、位二階叙す。 ⑧ この時、從五位上を賜う。 ⑨⑩ この時、宿称姓を賜う。  
 ⑪ この時、連姓を賜う。 ⑫⑬ この時、大和連姓を賜う。 ⑭ この時、宿称姓を賜う。  
 ⑮ この時、佐伯直姓を賜う。 ⑯ この時、百濟公姓を賜う。 ⑰⑱⑲ この時、曾称連姓を賜う。

第2表 阿波国板野郡田上郷延喜2年戸籍にみる氏姓一覧

	戸 主 不	凡 岑 直 戸	物 成 部 戸	粟 成 凡 宗 直 戸	矢 秀 田 男 部	氏 姓 別 計		戸 主 不	凡 岑 直 戸	物 成 部 戸	粟 成 凡 宗 直 戸	矢 秀 田 男 部	氏 名 別 計
服 部	24			11	10	45	凡 直	28	29	1	6	13	77
矢 田 部	18				38	56	物 部	18	4	25	4	1	52
建 部	7	2		1	5	15	海 部	3	9			24	14
許 世 部				5		5	秦	5			5		10

秋	月			4		4	忍	海	3					3		
雀	部	1				1	怪	部	1					1		
上	主	5				5	牟	佐	1					1		
栗	凡	10		41		51	息	長	1					1		
忌	部	6			2	8	錦	部	1		9			10		
家	部	29	4	4	20	57	品	知		1				1		
語	部	1				1	漢	人			1			1		
飛	鳥	3		3		6	木	直	1			1		2		
久	米	1				1	宗	部				4		4		
佐	伯	1				1	我	伴		1				1		
下	主			2		2	栗					1		1		
葛	寸	7	1	1	1	10										
日	下	1				1	戸	口	總	計	176口	46口	31口	97口	98口	448口

(参考文献 田中央郎「古代後期阿波の農村家族構造」『四国考古学古代史研究』2号 昭和45年)

以上の資料をもとに、順を追って、古代阿波における氏族分布をみてる。なお、忌部については次節で述べることにする。

「国造本紀」のなかに、「栗国造 輕嶋豊明御世。高皇産靈尊九世孫千波足尼定賜国造。」、「長国造 志賀高穴穂朝御世。観松彦色止命九世孫韓背足尼定賜国造。」と記されているが<sup>註(1)</sup>、このことから阿波には栗国、長国の二国があったといわれる。長国に関する伝承は『日本書紀』、『古事紀』をみてもあらわれてこない。允恭天皇14年の条、男狹磯が登場する物語においても「阿波国長邑之海人也。」<sup>註(2)</sup>とあって、長国とはない。長国についてはまだまだ問題が多い。

信頼できる史料で阿波最古のものは、養老七年銘の中王子神社墓碑である。つぎの銘文が判読されている<sup>註(3)</sup>。

「阿波国造 名方郡大領正<sup>七カ</sup>位下 栗凡直弟臣墓」(正面)

「養老七年歲次癸亥年立」(側面)

この墓碑は、現名西郡石井町中王子神社の御神体として伝わるもので、発見地は不明である。銘文の名方郡などからみて、中王子神社周辺であってよい。全長28.8cmのやや軟質の埴状のもので、四面とも下半部の風化が激しい。中央部は長方形で、上部と下部に方形の柵をもち、屋蓋と基礎をもつ組合せ式の墓碑と考えられる。この銘文から、栗凡直が郡司に任じられていたことがわかる。先の一覧表にあらわれた官職・身分からみても、国造・郡司を世襲していたことは明らかである。大化前代においても、地方首長として国造の地位にあったであろう。彼らの分布は名方・板野郡を中心に阿波郡にも及んでいたとみられる。『続日本紀』神護景雲元年条には「阿波国板野名方阿波等三郡百姓言。己等姓。庚午年籍被記凡直。唯籍皆着費字。自此之後。評督凡直麻呂等披陳朝庭。改為栗凡直姓。已畢天平宝字二年編籍之日。追注凡費。情所不安。於是改栗凡直。」とある<sup>註(4)</sup>。この記述は、板野、名方、阿波の三郡に相当数栗凡直姓がいたことを示すもので、田上郷戸籍もそれを裏付ける。同戸籍戸口総計448口のうち、栗凡直姓10口、凡直姓77口、栗姓1口と大多数を占めている。律令期の分布は、どちらかといえば板野郡を中心に行っている。栗凡直、凡直、栗と区別されるが、国造は栗凡直姓であって、他はそれから分化していたと考えられる<sup>註(5)</sup>。

栗国造に比して、長国造の史料はきわめて少ない。長直も国造、郡司の任にあったと思われ、阿波

国の南部、すなわち勝浦郡・那賀郡を統轄したとみられる。那賀は長に通じ、阿波国長邑の海人男狹碓の記事に出てくる長邑も同じである。『続日本紀』宝亀4年の条にみえる記述は、先に記した同書神護景雲元年の粟凡直の訴えと相通じるものがある<sup>註(6)</sup>。長直氏は吉野川流域には分布せず、那賀・勝浦に限られていたとみられる。

つぎに海部をみてみる。先にも記した阿波国長邑の海人男狹碓の伝承は有名である。『延喜式』踐祚大嘗祭の条に、「鰺𩺰五編。鰺𩺰十五𩺰。細螺。棘甲羸。石花等并廿𩺰。已上那賀潜女十人所作。」<sup>註(7)</sup>とある。これは踐祚大嘗祭に際し忌部とともに、那賀郡の潜女に由加物を献ずることを義務づけられていたことを示すものである。『和名抄』郷名には、那賀郡に「海部」がみえるが、「加伊布」と訓じ「アマベ」とは読まない<sup>註(8)</sup>。このことは、那賀郡からのち分かれて「海部郡」が設けられるが、「カイフ」と読むのにつながる。紀伊国海部郡などほとんどが「アマベ」と読むのに比して、特異な存在である。海部の分布は、県南海岸部、すなわち那賀郡のほか、吉野川下流域の板野郡や名方郡に存在することが史料にみえている。天平19年頃と推定される平城宮木簡には、板野郡井隈郷の戸主に「海部馬長」の名がみえる。また「阿波国進上御贄若海藻老籠 板野郡牟屋海」と記した木簡もある。牟屋海は撫養の海人と考えられている<sup>註(9)</sup>。

『日本三代実録』貞観6年の条をみると、海直や安曇部が名方郡に存在する<sup>註(10)</sup>。海直などは海部の統轄者であったことも考えられる。安曇部は、天平3年の太政官符に戸座として「壬生，中臣部」とともに阿曇部が上げられており<sup>註(11)</sup>、かなり古くから存在していたのであろう。なお、壬生，中臣部はこの史料以外に見られない。

このほか板野，名方，阿波郡に古くから存在する氏姓を上げると、波多部<sup>註(12)</sup>・秦<sup>註(13)</sup>・服部<sup>註(14)</sup>・錦部<sup>註(15)</sup>・木連<sup>註(16)</sup>・物部<sup>註(17)</sup>などである。これらは、田上郷戸籍にも数多くみられる。

他の氏姓で集中的に分布が想定されるものに佐伯部，漢人，百済部，棕部がある。佐伯部は、『日本書紀』景行天皇51年秋8月の条に、日本武尊が東国からつれてきた蝦夷を播磨・讃岐・伊予・安芸・阿波の五ヶ国においたのがこの部のはじめであるとされる<sup>註(18)</sup>。『新撰姓氏録』右京皇別下の佐伯直の項には同様の内容が記されている<sup>註(19)</sup>。阿波国に佐伯部がおかれていたことは、『続日本紀』貞観12年7月19日の条に「阿波国三好郡少領外従八位上仕直浄宗五人。賜姓佐伯直。」<sup>註(20)</sup>とあることから裏付けされる。佐伯直は佐伯部の統轄者と考えられ、国造・郡司にも任じられていたであろう。なお、この条には三好郡とあり、美馬郡を割き三好郡を分置したのが貞観2年3月2日である<sup>註(21)</sup>。ことと合せ考えれば、佐伯部の分布は現三好郡池田町・三好町・三加茂町といった地域に限定できる。

つぎに漢人をみてみよう。漢人は、『坂上系図』<sup>註(22)</sup>や『新撰姓氏録』<sup>註(23)</sup>によると、応神天皇の頃、後漢の靈帝の子孫である阿知使主を統率者として帰化した一族で、大和高市郡などに住むが、あまりにも人が多いため、摂津，三河，近江，播磨，阿波に移住したとある。阿波国の場合、天平宝字5年，天平勝宝2年の正倉院文書にみえる<sup>註(24)</sup>。本貫是那賀郡大野郷（太郷に同じ）とする。大野郷は『和名抄』にもみえ<sup>註(25)</sup>，現阿南市大野町を中心とする。田上郷戸籍にも漢人がみえる。

この大野郷の東に隣接すると思われる原郷<sup>註(26)</sup>には、百済部の分布がみえる。百済部は百済からの



渡来集団とされる。平城宮木簡には、原郷戸主百済牧夫戸部前守の名がみえる<sup>註(27)</sup>。『日本後紀』弘仁2年4月の条には、「阿波国人百済部広浜等一百人賜姓百済公」とあり<sup>註(28)</sup>、相当数の百済部がいたことを示している。この百済部広浜等と原郷とが結びつくかどうかは、今後の研究課題である。

『日本三代実録』貞観7年12月の条には、板野郡にもその名をみるが<sup>註(29)</sup>、田上郷戸籍には百済部はなく、板野郡内において漢人、百済部はきわめて数少ないのではないか。とりわけ、大野郷、原郷といった那賀川下流域に、渡来系氏族の名がみられることに注目しておきたい。

同じ那賀郡内において、棕部の分布を見出すが『日本三代実録』元慶5年4月の条には「復本姓曾称連」とあり、もともと曾称連であったことをうかがわせる<sup>註(30)</sup>。

以上、阿波における氏族分布の概要を述べてきた。つぎに、阿波忌部をとりあげておきたい。

## 2 阿波忌部について

阿波の忌部が登場するのは『日本書紀』神代上、宝鏡開始（一書第三）の段においてである。「下枝懸以粟国忌部遠祖天日鷲所作木綿」<sup>註(31)</sup>とみえ、阿波忌部の祖は天日鷲神であり、木綿を作っていたとする。「天日鷲為作木綿者」<sup>註(32)</sup>という記述は、同書天孫降臨の段でもみられる。

天日鷲神を阿波忌部の祖とすることは、前章でも記したように『古語拾遺』にみられる。しかし、『日本書紀』ではそれぞれ地方忌部の祖神を独立神としたのに対し、『古語拾遺』では太玉命が率いとなっている。そして、各忌部は、太玉命の孫である天富命によって率いられたとする。

ところで、天日鷲神を祭る神社は、『延喜式』神名帳に記載され、麻殖郡八座のなかに見出す。『忌部神社、名神大、月次新嘗。或号麻殖神。或号天日鷲神。』と記される<sup>註(33)</sup>。阿波国五十座のうち大社は、板野郡大麻比古神社、名方郡天石門別八倉比売神社とこの忌部神社の三社である。忌部神社が阿波国において重要な位置を占めていたことは、『続日本後紀』<sup>註(34)</sup>や『日本三代実録』<sup>註(35)</sup>に記す神階叙位をみてもわかる。

第3表 天日鷲神・大麻比古神・八倉比売神の神階叙位

年 代	天 日 鷲 神	大 麻 比 古 神	天 石 門 和 氣 八 倉 比 売 神	出 典
承和8年(841)8月			正 八 位 上	続日本後紀 巻10
嘉祥2年(849)4月	従 五 位 下			” 巻19
貞観元年(859)正月	従 五 位 上	従 五 位 上 (従五位下より)		日本三代実録 巻3
” 7年(865)2月			従 四 位 下 (正五位下より)	” 巻10
” 9年(867)4月		正 五 位 上		” 巻14
” 13年(871)2月			従 四 位 上	” 巻19
” 16年(874)3月			正 四 位 下	” 巻25
元慶2年(878)4月	正 五 位 下	従 四 位 下		” 巻33
” 3年(879)6月			正 四 位 上	” 巻36
” 7年(883)11月		従 四 位 上		” 巻44
” 7年(883)12月	従 四 位 下 (正五位上より)			” 巻44

以上の表をみて気づくことは、貞観年間以降、神階があまり上がらないことである。このことは、忌部氏の衰退とかかわりをもっているのかも知れない。

地方忌部の祖神が式内社に比定されているのは天日鷲神だけであって、他は見当らない。忌部神社の所在地は、『和名抄』郷名にみえる「忌部郷」とするのが妥当であろう<sup>註(36)</sup>。忌部郷は、現麻植郡山川町山崎字忌部を中心とする地域が考えられる。現在、「山崎忌部神社」がこの地の南、忌部山に祭られている。そして、次章で述べる「忌部山古墳群」は山崎忌部神社のちょうど裏山にあたる。

ところで、阿波忌部の実体を具体的に示す史料は正倉院御物の絶銘においてみられる。これには、「阿波国麻植郡川島少楮里戸主忌部為麻呂戸調黄絶壺疋 天平四年十月」と書かれている<sup>註(37)</sup>。川島は『和名抄』郷名にいう川島郷のことで、忌部郷の東に隣接する現川島町の地域と考えられる。筆者は、この忌部郷、川島郷を阿波忌部の濃密な分布地と考えている。

『続日本紀』神護景雲2年7月14日の条をみると、つぎの記述がある。

阿波国麻植郡人外従七位下忌部連方麻呂。従五位上忌部連須美等十一人賜姓宿祢。大初位下忌部越麻呂等十四人賜姓連<sup>註(38)</sup>。

これによって、麻植郡内に多数の阿波忌部がいたことを具体的に示す。また、奈良時代の仏教説話集『日本霊異記』には、「光仁天皇の代、麻植郡人忌部連板屋が、法華經を書写して麻植郡菟山寺に施入した忌部首多夜須子の過失をそしった罪によって、口が歪み、終生直らなかつた」<sup>註(39)</sup>という伝承が記されている。なお、菟山寺は現存せず、他の史料にも名をみせない。

この伝承で留意すべきは、忌部首多夜須子が首姓であることである。信憑性はともかく、『中臣宮處氏本系帳』には「栗国麻植県主之祖忌部首玉代」とあり<sup>註(40)</sup>、ここにも首姓を見いだす。さらに、先に記した『続日本紀』神護景雲2年7月14日の条にみえる忌部連須美は、同書天平神護元年正月7日の条に、従五位下から従五位上を賜わっている忌部毗登隅<sup>註(41)</sup>と同一人の可能性があり、それを仮定すれば、毗登は首に通じ同じく首姓であったことになる。『日本三代実録』貞観7年11月2日の条にも「忌部首真貞子」の名がみえる。

このように多くの史料に首姓を見い出す。阿波忌部も中央忌部と同じく、本来首姓をもつものがあったと考えられる。

阿波忌部が麻植郡以外にいたことは、田上郷戸籍をみてもわかる（第2表参照）。下って、寛治4年10月9日の三津郷郡司解状（京都上加茂神社蔵）には「傍吏小領 忌部近光」がみえる<sup>註(43)</sup>。しかし、麻植郡外に居住する忌部はきわめて少数であったと思われる。

以上、阿波における忌部の分布をみてきたが、最後に彼らの部民としての生産活動をみておきたい。

『日本書紀』は、木綿（ゆう）作りを上げる<sup>註(44)</sup>。『古語拾遺』は、阿波国に移り穀（かち）、麻を植えたとする<sup>註(45)</sup>。郡名の起こりもこのことからとする。そして、大嘗祭には木綿、麻布（あらたへ）など種々の物を献上すると記している。

『延喜式』賤祚大嘗祭には、つぎの由加物の貢進を定めている。

阿波国所献匱布一端。木綿六斤。年魚十五籠。蒜英根合漬十五籠。乾羊蹄。蹲鴟。橘子各十五籠。

已上忌部所作。鰻冊五編。鰻鱈十五冊。細螺。棘甲羸。石花等并廿冊。已上那賀潜女十人所作。<sup>註(46)</sup>

これをみると、鹿布、木綿を主として、鮎、ニンニクの漬物、野大黃野菜、里芋、柑子などで、畑作物が多い。鮎は吉野川流域とその支流の漁場が考えられ、麻殖郡も漁場としてふさわしい。那賀郡の潜女が海産物に限られていることと対象的である。

これら由加物のほか由加物の器の料として、「馬一疋。大刀一口。弓一張。箭廿隻。鋏一口。鹿皮一張。庸布一段。木綿。麻各一斤。堅魚。鰻各四斤。海藻。滑海藻各四斤。酒。米各四斗。塩四升。已上阿波国麻殖。那賀兩郡所輸。」<sup>註(47)</sup>を義務づけられている。忌部・潜女と明記していないが、麻殖・那賀兩郡とあることからみて、忌部、潜女は関連していたものとみておきたい。内容的にみて、堅魚など海産物や塩は那賀郡の産物であり、麻殖郡には馬、大刀、弓、箭、鋏、鹿皮、庸布、木綿、麻などが関係するであろう。この想定が正しいとすれば、繊維製品のほかに、馬、大刀、弓、箭、鋏などの生産にあたっていたとみられることである。とくに大刀、箭、鋏など鉄製品がみられることは重要である。同じ踐祚大嘗祭の阿波国の規定のなかに「其幣五色薄絶各六尺。倭文六尺。木綿。麻各二斤。葉薦一枚。作具鐙。斧。小斧各四具。鎌四張。鑿十二具。刀子四枚。鉈二枚。火鑽三枚。並令忌部及び潜女等量程造備。」<sup>註(48)</sup>とあって、鉄製品が数多く上げられている。麻殖郡内でたたらのはじめは今のところまだないが、これからの大きな課題である。というのも、地方忌部の祖神のなかにたたらに関与することが多く、森秀人氏は忌部と金属鑄造との結びつきを強調している<sup>註(49)</sup>。

阿波忌部は本来的には農民集団とみられるが、上記のような特殊な手工業生産にかかわりがあるとすれば、はたして彼らの出自はいかなるものであったのか、疑問は大きい。

註(1) 鎌田純一『先代旧事本紀の研究』校本の部 吉川弘文館 昭和53年 333頁

註(2) 『日本書紀』前篇 新訂増補国史大系 吉川弘文館 昭和49年 346～347頁

註(3) 東野治之『日本古代の墓誌』 飛鳥資料館 昭和52年 71頁

註(4) 『続日本紀』後篇 新訂増補国史大系 吉川弘文館 昭和51年 引用文巻二十八 341頁

註(5) 八木充「凡直国造と屯倉」『古代の地方史』山陰・山陽・南海篇 朝倉書店 昭和52年

凡直国造制については同書(70～95頁)に詳しい。八木氏は、「凡直国造は、その後裔氏族の分布からみる限り、西国、しかも山陽・南海地域に局限される、後次的に編成された一群であった。凡直国造の存在する地域には、その他の国造の先行する場所が少なくない。……凡直氏が二・三郡地域にわたって居住する場合が通常であったから、後期的に編成された凡直国造は、早期的に成立したいくつかの小国造を併合し、その頭域を総括したより広域の国造として地方管治にあたったものといえる。」(81頁)とし、「一次的国造制が在地有力首長層とその支配領域を基盤に成立したのに対し、二次的国造、とりわけ凡直国造制により広領域の地域的統一の首長層とその領域をもって編成した。」(83頁)ととらえる。また粟凡直について、「同時に凡直・凡の氏を記しているから、地方首長の同族同部で、阿波凡直と凡直との称呼上の差異によって、身分序列を表そうとした側面も見逃せない。」(75頁)と指摘している。

註(6) 『続日本紀』後篇 前掲書 巻三十二 410頁

註(7) 『延喜式』前篇 新訂増補国史大系 吉川弘文館 昭和50年 引用文巻七 148頁

註(8) 也辺彌『和名類聚抄郷名考証』増訂版 吉川弘文館 昭和45年 588頁

註(9) 『平城宮木簡』一(解説) 奈良国立文化財研究所 昭和44年 143頁, 139頁

註(10) 『日本三代実録』前篇 新訂増補国史大系 吉川弘文館 昭和49年

同書(139頁)、貞観6年8月8日の条には「阿波国名方郡人二品治部卿兼常陸太守賀陽親王家令正

六位上安曇部栗麻呂。改部字賜宿祢。栗麻呂自言。安曇百足宿祢之苗裔也。」とある。

なお、阿波における海人については、吉見哲夫氏が一連の研究を発表している。「古代阿波における海人族の源流（一〜）」『徳島教育』263号 昭和44年

註(11) 『類聚三代格』前篇卷一 新訂増補国史大系 吉川弘文館 昭和52年 29頁

註(12) 『平城宮木簡』一 前掲書 141頁

S K 820土壙（天平19年頃）出土木簡のなかに、表「阿波国板野郡井隈戸主波多部足人戸」、裏「秦人豊日白米五斗」と記した木簡がある。波多部は秦部に通じる。

註(13) 註(12)に同じ

註(14) 『平城宮木簡』二（解説） 奈良国立文化財研究所 昭和50年 233頁

S K 3305土壙出土木簡のなかに、表「阿波国板□□」、裏「戸主服□□□」と記した木簡がある。板□□は板野であり、服□□は服部と考えられている。

註(15) 『寧楽遺文』中巻 東京堂出版 昭和52年 739頁

同書所収の東南院文書「阿波国新嶋莊券」（天平勝宝八歳十一月五日）のなかに「錦部志止祢」の名がみえる。同文書は『大日本古文書』4巻（明治36年）206頁にも収録されている。

註(16) 『続日本紀』前篇 新訂増訂国史大系 吉川弘文館 昭和51年 21頁

慶雲元年六月十五日の条に「阿波国獻木連理。」とある。

註(17) 『平城宮発掘調査出土木簡概報』（六） 奈良国立文化財研究所 昭和44年

同書（8頁）には「阿波国阿波郡秋月郷庸米物部小龍一俵」と記した木簡が収録されている。秋月郷は『和名抄』郷名にもあり、現阿波郡土成町秋月周辺であろう。なお、「田上郷戸籍」の粟凡直成宗戸のなかに「秋月」の名がみえるのは、この秋月郷と関連するのであろう。

註(18) 『日本書紀』前篇 前掲書 221～222頁

註(19) 佐伯有清『新撰姓氏録の研究』本文篇 吉川弘文館 昭和49年 181～182頁

同書、右京皇別下に佐伯直がみえ、「己等是日本武尊平東夷時。所俘蝦夷之後也。散遣於針間。阿芸。阿波。讃岐。伊予等国。仍居此氏也。後改爲佐伯。」とある。

註(20) 『日本三代実録』前篇 前掲書 276頁

註(21) 同上書 48頁

註(22) 「坂上系図」『群書類図部集』第七 続群書類従完成会 昭和52年 381頁

「坂上系図」には「爾時阿智王奏。建今来郡。後改號高市郡。而人衆巨多。居地隘狭。更分置諸国。摂津参河近江播磨阿波等漢人村主是也。」とある。

註(23) 佐伯有清『新撰姓氏録の研究』本文篇 前掲書 358頁

同書所収の「新撰姓氏録逸文」阿智王の条に「坂上系図」と同様の内容が記されている。

註(24) 『大日本古文書』15巻及び25巻 所収の正倉院文書にみえる。15巻所収、天平宝字5年2月22日（27～28頁）、同年2月23日（29～30頁）、同5年3月3日（36～37頁）の奉写一切経所解案には、右勇士衛火頭漢人大万呂の名がみえる。漢人大万呂は那我郡太郷戸主漢人比呂戸口と記される。また25巻所収、天平勝宝4年4月4日の智識優婆塞等貢進文（148頁）に「酒見君奈良万呂年廿四 安波国長郡大野郷戸主漢人根万呂戸口」とある。なお酒人君は『新撰姓氏録逸文』賀茂朝臣本系（356頁）に「次湊多豆足尼。次忍根足尼。是酒人君。大和。阿波。讃岐等国賀茂宿祢。并鴨部等祖也。」とある。

註(25) 池辺彌『和名類聚抄郷名考証』前掲書 587頁

註(26) 同上書（588頁）には「幡羅」とあり、波良と訓じる。

『徳島県史』第1巻 徳島県 昭和39年

同書（318頁）で福井好行氏は「那賀川町平島に宇原の土地がある。原・西原・古庄・大京原・羽の浦の地方を充てる。阿波志、大日本地名辞書も、共にこの説を採っている。」と述べている。

註(27) 『平城宮発掘調査出土木簡概報』（六） 奈良国立文化財研究所 昭和44年 8頁

註(28) 『日本後期』 新訂増補国史大系 吉川弘文館 昭和52年 100頁

註(29) 『日本三代実録』前篇 前掲書 167頁

貞観7年12月9日の条に「阿波国板野郡人百濟岑子女。一産三男。給稻三百束。乳母一人。」とある。

註(30) 同上書 496頁

註(31) 『日本書紀』前篇 前掲書 36頁

註(32) 同上書 74頁

註(33) 『延喜式』前篇 前掲書308頁

註(34) 『続日本後期』 新訂増補国史大系 吉川弘文館 昭和51年

註(35) 『日本三代実録』前篇 前掲書

『日本三代実録』後篇 新訂増補国史大系 吉川弘文館 昭和52年

註(36) 池辺彌『和名類聚抄郷名考証』 前掲書 585頁

同書には麻殖郡内の郷名として「呉島」（久礼之万）,「忌部」（伊無倍）,「川島」（加波之万）,「射立」（伊多知）の4郷が上げられている。

なお、忌部神社の所在地については、明治初期の官幣大社争奪がからみ大論争となったことは有名である。ここでは、本稿の目的ではないので参考文献をかかげておくことにしたい。

『阿波国に於ける忌部族調査史料』第一輯 徳島県 昭和8年

藤井貞文「忌部神社所在地考」『神道学』83号 昭和49年

藤井貞文「忌部神社所在地考（承前）」『神道学』84号 昭和50年

註(37) 『寧楽遺文』下巻 東京堂出版 昭和52年 786頁

同書は「少猪」とするが、『徳島県史』第1巻（昭和39年）220頁掲載の写真をみると「少楮」と読める。

註(38) 『続日本紀』後篇 前掲書 356頁

註(39) 『日本霊異記』 日本古典文学大系70 岩波書店 昭和50年 372～373頁

註(40) 『中臣宮處氏本系帳』 神宮文庫蔵本による。

同書には「天平六年三月十五日 讃岐国山田郡大領正七位下勲業中臣宮處朝臣静麻呂」と後記する。

註(41) 『続日本紀』後篇 前掲書 317頁

註(42) 『日本三代実録』前篇 前掲書 166頁

註(43) 『徳島県史』第1巻 前掲書 207～210頁

註(44) 註(31), (32)に同じ

註(45) 『古語拾遺』 新撰日本古典文庫4 現代思潮社 昭和51年

註(46) 『延喜式』前篇 前掲書 147頁

註(47) 同上書 147頁

註(48) 註(46)に同じ

註(49) 森秀人「古語拾遺と古代祭政」『古語拾遺』前掲書所収

森氏は同書（278頁）のなかで、「忌部氏はこのように、金属铸造と深い関係のある職掌からの出自を暗示させており」と述べている。



### 第3章 考古学的にみた6・7世紀の阿波

#### 1 段ノ塚穴型石室と忌部山型石室

(第1・2・3・4・6図参照)

美馬郡周辺の石室が特異であることは、笠井新也氏などによって早くから指摘されてきた<sup>註(1)</sup>。国史跡段ノ塚穴に代表されるようなタイプの横穴式石室が、この周辺にのみ見られるのである。和歌山県岩橋千塚との関連も注目されてきたが、決定的相違点もみられる<sup>註(2)</sup>。つまり、天井を前後から、側壁を左右から持ち送り、いわゆる穹窿式天井を構築し、平面プランが胴張り又は末広がり呈する横穴式石室である。また、石棚を持つ古墳が7例含まれている。この石室を段ノ塚穴型石室と呼び、『徳島県博物館紀要』第4集<sup>註(3)</sup>・第8集<sup>註(4)</sup>でも報告してきた。

この段ノ塚穴型石室は、東は阿波郡阿波町から西は美馬郡美馬町までの東西わずか16Kmの範囲に25基の分布が認められる。この一帯では他の型の横穴式石室は認められず<sup>註(5)</sup>、地質上・地形上の制約をこえて吉野川兩岸にわたっている。いわゆる群集墳を形成せず<sup>註(6)</sup>、段丘端や丘陵中腹に位置し、段ノ塚穴のように盟主的な様相を感じさせるものがある。この分布を詳細に検討していくと、地域的に4グループに分けられる。つまり、吉野川北岸の東部をⅠグループ、南岸東部をⅡグループ、南北岸中部をⅢグループ、南北岸西部をⅥグループとする。Ⅰグループは、北岡古墳(東・西)と脇町の拝原の古墳が該当する。Ⅱグループは、美馬郡穴吹町の戎古墳・尾山古墳・三谷古墳・三島古墳群が該当する。Ⅲグループは、段ノ塚穴に代表され、真鍋塚、野村八幡古墳や南岸の江ノ脇古墳・西山古墳などが該当する。Ⅵグループは、荒川古墳をはじめ八幡古墳群、大國魂古墳などが該当する。

段ノ塚穴型石室の変遷を形態的に把握していく指標として、平面プランと玄門部の構造に着目してきた。平面プランの胴張り度によってA～C型に分類し、玄門の構造特に玄門立石の位置から第1～第3類に分類した<sup>註(7)</sup>。その結果、原則として、第1類型→第2類型→第3類型の変遷をたどるが、その初現を第2類型B型、その終末を第3類型C型と現時点では想定している。遺物の出土している古墳が少なく、断定はできないが、大半の石室が6世紀後半の築造と考えられる。最終末と考えている江ノ脇古墳は、7世紀前半にまで下る<sup>註(8)</sup>。問題はその初現であるが、大國魂古墳では6世紀前半に遡る可能性が強い。この大國魂古墳に代表される第2類型B型の特徴は、平面プランが正方形ないし横長プランとなる点である。しかも玄室上半部では隅丸の構築技法が用いられている。また、大國魂古墳は石棚を持ち、その石棚が天井面近くに取り付けられており、天井石との間に空間をあまりもたない形である。石棚の性格や初現を考える上で重要な古墳といえよう。

このような段ノ塚穴型石室の変遷を各グループで検討してみると、各グループ内でその系列をたどることができる<sup>註(9)</sup>。さらに視野を広げて段ノ塚穴型石室の分布域全体をみると、初現と考えられる石室はⅡ・Ⅵグループといった東西の端部に分布する。最盛期とみられる6世紀後半には各グループで築造されるが、特にⅢグループでは量的にも集中し、段ノ塚穴といった大規模なものに発展している。そして、終末もⅢグループである。この現象は時期が下るに従って、大きな政治的権力に結集されていくかのようである。しかも、このⅢグループには美馬郡衛推定地や阿波最古の寺院である郡里廃寺<sup>註(10)</sup>をその中心にもっている。特に郡里廃寺築造者は、段ノ塚穴被葬者との関連が考えられるの

である。

美馬郡の段ノ塚穴型石室に隣接して、麻植郡にも特色あるまとまりをみせる横穴式石室が存在する。段ノ塚穴型石室ほどの強いイメージはないものの、玄室空間をドーム状に広げるために天井石の持ち送りが認められる点や玄室を隅丸に構築する点などの特徴を指摘できる。こうした特徴をもつ石室を忌部山型石室と呼ぶことにする。この忌部山型石室は、麻植郡山川町忌部山の忌部山古墳群を中心に、麻植郡鴨島町から山川町にかけての19基が現在までに確認されている。鴨島町上浦の王子壇古墳群が、この忌部山型石室に属するかと考えられるが<sup>註(11)</sup>、現在消滅しており確認する方法がない。分布を検討すると、東から国立療養所周辺、鷲ヶ巢古墳群、峯八古墳群、忌部山古墳群周辺、西ノ原古墳群、境谷古墳群のグループに分けられる。分布の特徴として、250m前後という高所に立地する古墳群が存在することである。それらは、1つの尾根を占拠して小規模ながらも群集墳を形成している。段ノ塚穴型石室があまり群として存在しないことに比べて特徴的である。これらのグループでの変遷を考えたいが、まだ検討中の段階にあり、忌部山古墳群で考えてみたい。忌部山古墳群は5基からなるが、2グループに細分され、それぞれ3系列考えられる。しかし、その時間差はほんの僅かで、6世紀後半の範囲に収まる。今までに遺物のわかっている古墳もこの時期のものであり、石室の形態にもあまり差のないことなどから6世紀後半に一挙に形成された可能性が強い。また、複室構造の石室が西宮古墳で認められる<sup>註(12)</sup>ことやこれに関連して羨門が忌部山1号墳で認められる点も特徴的である。

段ノ塚穴型石室と忌部山型石室を比較してみよう。天井石の持ち送り方が違うため、段ノ塚穴型石室に比して忌部山型石室は高さが低い。時期的にも段ノ塚穴型石室が6世紀前半～7世紀前半にわたるのに対して、忌部山型石室は6世紀後半に一挙に形成されていった可能性が強く、6世紀前半に遡る可能性はきわめて少ない。

ところで、段ノ塚穴型石室の分布がもっと西へ拡大できるのか考えてみたい。隣接する三好郡三野町・三加茂町は存在する可能性はあるが、池田町では可能性は低い。池田町周辺で内部構造の判明している古墳はないので、外見だけから判断せざるを得ない。外見では吉野川下流域の北岸（板野町・大麻町）のものに類似しているものがある。そこで、見通しとして、池田町周辺は徳島県東部との関連がみられ、段ノ塚穴型石室とは全く異なるのではないかと予測している。しかし、全く逆の場合もあり得るわけで、その場合は段ノ塚穴型石室が県西部一帯を占めていたことになり、強大な政治的権力の存在を予想できる。また、阿波郡勝命村（現：阿波郡阿波町勝命）に複室構造の古墳があったと報告されている<sup>註(13)</sup>。現在確認できないが、段ノ塚穴型石室であった可能性が強い。また、同町には正広の塚があり、忌部山型石室の可能性が強い。このようにそれぞれ分布がさらに拡大する可能性をもつ。

また、段ノ塚穴型石室の東端に位置する穴吹町の戎古墳・尾山古墳も注目される。というのも、戎古墳は天井部の構造が忌部山型石室と酷似しており、段ノ塚穴型石室との折衷型式かとの印象を受けるものである。石室の構造に類似性があり、しかもその発想がより大きな玄室空間を得たいということと同じである。その上にこのような折衷型式の石室が存在することや複室構造の古墳をもつことを



考え合わせると、この2つのタイプの石室は兄弟関係にあるといえる。つまり、段ノ塚穴型石室の初現である大國魂古墳が6世紀前半に築造され、そこから本質的には同じでありながら、それぞれに個性をもつ2つの系列に分化していったと考えられる。1つは、石室の巨大化を図り、特に高い天井面を形成するもので、段ノ塚穴型石室がこれである。2つは、大國魂古墳の上半部でみられた玄室の隅を丸くする技法が発展した隅丸のプランに重点がおかれたもので、忌部山型石室がこれである。この2系列は隣接して位置しているのである。しかも同一地区内では、他の型式の横穴式石室は認められず、墓制に対する強い規制力が窺える。これらからこの2系列を築造していった集団は、同じ系譜をもつ集団と推定される。そして、それぞれ性格の異なった個性をもつ集団へと変化していったのではなかろうか。

美馬郡周辺の段ノ塚穴型石室グループは、郡里廃寺を築造せしめた氏族集団につながる。最初は各村単位であったが、最終的に郡単位の政治的権力にまとめあげられていったのではなかろうか。これに対して、麻植郡周辺の忌部山型石室もある氏族集団が個々に群集墳を形成していったと考えられる。そして、その中央部に蔦ヶ巣古墳群・峯八古墳群・忌部山古墳が谷1つずつ隔てて位置している。このグループは高所に立地するという特徴も持っている。忌部山古墳群から見下ろす一帯は『忌部郷<sup>註(14)</sup>』にあたり、蔦ヶ巣古墳群は『川島郷<sup>註(15)</sup>』を見下ろす。こうした状況は、阿波忌部を考える重要な手がかりとなる。また、複室構造をもつことも、これら2つのタイプの石室の系譜を考える重要な鍵であろう。

## 2 横穴式石室の諸様相

(第7図参照)

前節で段ノ塚穴型石室と忌部山型石室の分布をとらえて述べてきた。次に、これらのタイプ以外の横穴式石室は、徳島県下でどのような分布をみせ、どのような様相を呈するのか、をとらえていきたい。そこで、旧の郡名で表現した次の3地域（名方郡、板野・阿波郡、勝浦・那賀郡）に分けて、横穴式石室をみていきたい。

まず、名方郡（現徳島市・名東郡・名西郡）であるが、6世紀後半に各地で横穴式石室が構築されていく。鮎喰川流域と園瀬川流域という大きく2地域に分けられる。前者には国府町から名西郡石井町にかけての気延山古墳群、鮎喰川をはさんだ対岸の名東古墳群、少し上流に遡った入田町周辺がおもなものである。後者には八万町の恵解山古墳群、さらに上流の上八万町の樋口古墳群などがあるが、鮎喰川流域とは量的にかなり劣る。この地域の特徴は、横穴式石室が長方形プランを呈し、両袖ないしは片袖の玄室構造をとることである。片袖式が先に出現するかどうか不明だが、片袖式の例として気延山古墳群の尼寺2号墳<sup>註(16)</sup>・樋口古墳群の樋口2号墳<sup>註(17)</sup>があげられる。尼寺2号墳は、森浩一編年<sup>註(18)</sup>の須恵器Ⅲ型式の高坏片等を出土している。が、そのすぐ南にはⅡ型式の須恵器を出土した尼寺1号墳がある。尼寺1号墳は、組合式石棺を内部主体とする<sup>註(19)</sup>。こうしたことは、横穴式石室の採用を考える上で非常に重要である。さらに論を進めるならば、気延山古墳群では横穴式石室の採用が遅れ、6世紀前半には遡りえないのかもしれない。また、樋口古墳群の場合、すぐ北に両袖式の横穴式石室である1号墳があるが、前後関係はわからない。

ここで恵解山古墳群の問題を挙げてみたい。恵解山には10基の古墳が築造され、そのうち3基は横穴式石室である。5号墳は6世紀後半、7号墳は7世紀初期と推定されている<sup>註(20)</sup>。しかし、他の古墳は組合式石棺や竪穴式石室を内部主体としており、5世紀前半のものと考えられている。ここで、9号墳<sup>註(21)</sup>以降、5号墳まで年代的に断絶があることが指摘できる。

6世紀末には、石室の巨大化、巨石化の現象がみられる。気延山古墳群の矢野古墳、は全長8mという長大な石室で、随所に2mにも及ぶ巨石を用いており<sup>註(22)</sup>、6世紀末から7世紀前半と考えられる。そして、最終末の7世紀前半には名東古墳群の穴不動古墳が築造されている。穴不動古墳は、石室内には平坦な巨石を使用する。玄室の長さと羨道の長さが同じで、長さとの幅の比が2:1というように企画の優れた長方形プランを呈する石室である<sup>註(23)</sup>。

入田町の内ノ御田には須恵器の窯跡<sup>註(24)</sup>があるが、6世紀後半以降のものでこの地域の特徴を示唆しているかのようである。この窯跡にともなって、横穴式石室が築造されている。

この名方郡の横穴式石室は、畿内の影響を強く受けてかなりの数築造され、年代的にも途切ることがない。が、現時点では6世紀前半に遡るものが不明で、横穴式石室の採用の問題をもっと考えていく必要がある。

次に板野郡（現鳴門市・板野郡）・阿波郡についてみてみよう。分布は、鳴門市大麻町大谷から池ノ谷にかけて集中している。また板野町、上板町、土成町、市場町、阿波町の各地にも散在している。まず、横穴式石室の採用の問題について、鳴門市瀬戸町の日出古墳群<sup>註(25)</sup>で考えてみたい。5基からなり、6世紀前半の須恵器を大量に出土した日出製塩遺跡に関連する古墳群である。このうち、D号墳は組合式石棺を内部主体とし、6世紀前半の須恵器を出土している。この古墳群でただ1基の横穴式石室であるE号墳は、石室の構造などは全くわからないが、日出遺跡の存続年代を考え合わせると、6世紀前半へ遡る可能性は大きい。

他に特色あるものとして、大谷周辺の穴観音古墳や葛城神社古墳がある。いずれも鳥居龍蔵博士によって発表されている<sup>註(26)</sup>。出土遺物は明確でないが、葛城神社古墳から黒色土器の有台坏が出土したらしい<sup>註(27)</sup>。葛城神社古墳は片袖式の横穴式石室で、同一墳丘に小竪穴式石室をもつ<sup>註(28)</sup>。砂岩積みみの長方形プランである。穴観音古墳は、やや胴張りのプランを呈するが、天井石は水平に架けている。6世紀後半と把握してよいだろう。土成町の向山1号墳も片袖式で長方形プランを呈するが、6世紀中ごろより下の時期と考えられている<sup>註(29)</sup>。また、穴薬師古墳は修築されて原形をとどめないが、緑色片岩を用いて構築している特徴がある。

阿波郡はあまり明確でないが、阿波郡の西部は前述したように北岡古墳群は段ノ塚穴型石室であり、正広の塚は段ノ塚穴型石室か忌部山型石室のいずれかであろう。東部の市場町がどうなのかは不明である。

名方郡と比べてみると、大きな違いは石材である。というのも、和泉砂岩層群の地質構造から、石室の構築にはおもに砂岩が使用されている。そのため、左右の持ち送りが急になり、天井面の幅が狭くなっている。これは石材の制約からでてきた相違で、基本的には名方郡に分布する石室と同じ様相を示しているといえる。

目を南へ転じて、勝浦郡（現徳島市の一部、小松島市、勝浦郡）那賀郡（現阿南市・那賀郡・海部郡）を見てみよう。小松島市芝生町周辺と羽ノ浦町宮倉周辺、阿南市の皇子山古墳群・八鋒山古墳群・舞子島古墳群、県南部海南町周辺におもな分布をみせる。いずれも6世紀後半からの築造と考えられる。ここで主要な横穴式石室の特徴を考えていきたい。

学原剣塚古墳<sup>註(30)</sup>は、須恵器のほかに鉄器・金環などを出土しているが、6世紀後半以降の築造と考えられ、長方形プランである。また、椿泊湾に浮かぶ舞子島にも5基以上の古墳群が築造されている<sup>註(31)</sup>。無人島ということを見ると、海上交通ないしは製塩・漁業との関連が考えられる。横穴式石室は、長方形プランで、天井石を水平に架けている。さらに南の海南町の大里古墳群<sup>註(32)</sup>と穴喰町の穴喰古墳群<sup>註(33)</sup>があるが、いずれも長方形プランの横穴式石室で、畿内色の強いものである。平野が狭少な地域であり、海上交通や漁業との関連が考えられている。

終末期の石室として、羽ノ浦町の観音山古墳・芝生町の弁慶の岩窟古墳があげられる。観音山古墳は、全長7.35m、玄室の長さとの比が2:1という長方形プランを呈する<sup>註(34)</sup>。弁慶の岩窟古墳は、玄室長5.80mという長大な横穴式石室で、7世紀前半の築造と考えたい<sup>註(35)</sup>。

この地域の中心には、羽ノ浦町の宮倉周辺が考えられる。屯倉のおかれた所でもあり、政治的な中心とも考えられる。横穴式石室にみる限り、石材の差はあるが、基本的には畿内色の強いプランを呈している。また、年代的にも6世紀後半以降と現時点では考えられる。

これらの3地域の横穴式石室には、明確な差は認められなかった。もちろん石材の差はあり、その制約による差、側壁の持ち送りや天井面の構築、平面プランに若干の差を生み出している。しかし、基本的には同じ様相を呈しているとみてよい。

個々の石室の個性という範囲にとどまっているようである。段ノ塚穴型石室や忌部山型石室とは明確に区別できる畿内色の強い横穴式石室といえよう。つまり、阿波の東部、海岸寄りの一帯は、畿内からの影響を強く受けた横穴式石室が築造されたのである。西部の段ノ塚穴型石室・忌部山型石室とは全く対照的である。これが、その集団の性格や出自を示すものなのであろうか。

### 3 前期古墳分布にみる地域性

（第5図参照）

遡って前期古墳に注目してみる。まず、前方後円墳の分布である。現時点では12基確認又は推定<sup>註(36)</sup>されているが、1基は横穴式石室をもつ後期古墳<sup>註(37)</sup>である。このうちで最古に位置づけられるのが、三好郡三加茂町の丹田古墳<sup>註(38)</sup>である。標高320mの高所に立地する積石塚の前方後円墳<sup>註(39)</sup>で、全長37m、前方部幅6.6m、後方部径17m、高さ3mを測る。内部主体は、全長4.51m、幅1.28～1.30mの断面合掌形の竪穴式石室である。銅鏡、鉄剣、鉄斧、小型鉄器片が出土している。銅鏡は、径11.4cmの白銅質で、「上□□□□□□吉□□子」<sup>註(40)</sup>の銘帯が残されている舶載鏡である。これらから、4世紀初頭と扱えられる。なお、谷一つ隔てた後方には前期古墳に位置づけられる岩神古墳<sup>註(41)</sup>がある。内部主体は不明である。

4～5世紀の前方後円墳を中心とした前期古墳を地域的にみていく。名方郡（現徳島市、名西郡）の前方後円（方）墳には、気延山古墳群の奥谷古墳、宮谷古墳、そして最近発見された山の神古墳が

ある。鮎喰川の対岸には名東古墳群の八人塚古墳、さらには徳島市勢見町の勢見山古墳がある。これらの前方後円墳の他に、重要な前期古墳も数多く築造されており、それについても触れていくことにする。

まず、八人塚古墳である。丹田古墳と同じく積石塚の前方後円墳で、全長60m、前方部幅15m、後円部径30m、高さ4mを測り、積石塚の前方後円墳としては全国最大規模<sup>註(42)</sup>である。内部主体は不明であるが、堅穴式石室の可能性が強い。また、名東古墳群の一角に節句山古墳群がある。1号墳は、石蓋磐棺を内部主体とし、弥生期の墳墓の可能性が考えられている。2号墳は、組合式石棺を内部主体とし、四獣鏡や鉄器を出土しており、4世紀と考えられている<sup>註(43)</sup>。これら節句山古墳群と八人塚との関連を考えていくことが重要であろう。

次に気延山古墳群をみていく。奥谷古墳は、全長約50m、前方部幅20m、後方部幅25m、高さ4mを測る前方後方墳<sup>註(44)</sup>である。裾部に埴輪列が廻っているが、それから4世紀後半と考えられている<sup>註(45)</sup>。宮谷古墳は全長40m、前方部幅12m、後円部径27m、高さ3mの前方後円墳<sup>註(46)</sup>である。開墾のため後円部が削平されている。内部主体・出土品も不明であるが、4世紀後半～5世紀初頭にかけての築造とみられる。名西郡石井町で最近発見された山の神古墳は、全長60m、前方部幅22m、後円部径30mの前方後円墳<sup>註(47)</sup>で、前方部の裾が若干開く形である。宮谷古墳と同じ時期と考えたい。また、気延山古墳群での重要な前期古墳として清成古墳群があげられる。それぞれ堅穴式石室・組合式石棺を内部主体とする。堅穴式石室は長さ5.52m、幅72～86cmを測り、石室内から鉄鉢・鉄鏃、墳丘から底部穿孔土器が出土している。この古墳の南2.5mにある組合式石棺は長さ1.67m、幅37～40cmを測り、円行花文鏡、鉄製品が出土している。後者が前者に後行するが、前者は4世紀末から5世紀初期と考えられている<sup>註(48)</sup>。この他、石剣の出土した内容古墳も注目される。長さ約2.1m、幅50cmの組合式石棺を内部主体とし、熟年男性を埋葬していた。副葬品は石剣1点。4世紀後半とみられる<sup>註(49)</sup>。

眉山の東から南にかけての地域をみていくと、東端の山頂部に勢見山古墳が位置する。封土の流失が激しく原形をとどめないが、内部主体は長大な堅穴式石室である。石室内にはU字形の粘土床が認められ、割竹形木棺を納めた断面がある<sup>註(50)</sup>。漢式鏡や筒形銅器の出土があり<sup>註(51)</sup>、4世紀後半と考えられる。また、石製品を出土した古墳に、徳島市上八万町星河内の巽山古墳がある。長さ6m、幅2.3mの堅穴式石室を内部主体とし、銅鏡3面、鋳形石4個、車輪石8個、石剣4個、太刀1口が出土している<sup>註(52)</sup>。これらから4世紀後半と考えられている。この古墳の周辺には、7個もの銅鐸が出土した美田遺跡<sup>註(53)</sup>がある。同様に、名東古墳群・気延山古墳群の間を流れる鮎喰川流域にも、銅鐸2個と銅剣1口の共伴した源田遺跡<sup>註(54)</sup>、銅鐸4個が出土した安都真遺跡<sup>註(55)</sup>がある。さらに上流には、平形銅剣の出土した左右山<sup>註(56)</sup>、東寺<sup>註(57)</sup>の遺跡がある。また、古墳群の眼下には、名東遺跡<sup>註(58)</sup>、矢野遺跡<sup>註(59)</sup>が弥生時代前期以降立地している。つまり、銅鐸祭祀の集団がそのまま前期古墳築造へと発展したかのようである。今後、こうした弥生時代末の青銅器埋納地と前期古墳の関連を考えていく必要性を痛感する。

次に、名方郡とは吉野川対岸の位置にある板野郡（現板野郡、鳴門市）をみていく。板野町の愛宕

山古墳、鳴門市大麻町池ノ谷の天河別神社古墳群、宝幢寺古墳がある。愛宕山古墳は、全長65m、前方部幅32m、後円部径40m、高さ7mを測る前方後円墳である。内部主体は、長さ6m、幅1.1mの竪穴式石室で、埴輪・短甲破片・鉄剣破片・銅鏃・鉄鏃・管玉・ガラス小玉が出土している。これらから5世紀前半（初頭？）と考えられている<sup>註(60)</sup>。天河別神社古墳群は5基からなり、うち2号墳が前方後円墳と考えられているが、詳細は不明である。銅鏡なども出土しており<sup>註(61)</sup>、4世紀末から5世紀初頭と考えられる。他の古墳も出土品などから前期古墳と考えられ、重要な古墳群である。このすぐ近くにある宝幢寺古墳は、標高30mの尾根の先端部に立地する前方後円墳で、全長42m、前方部幅9m、後円部径18～21m、高さ2.5mを測る<sup>註(62)</sup>。内部主体、出土品は不明であるが、4世紀末から5世紀初頭と考えられる。この他、大麻町周辺には銅鏡などを出土した前期古墳も多くあったらしいが<sup>註(63)</sup>、詳細は把握できていない。いずれにしろ、板野郡では大麻町から板野町にかけて集中的に分布している。

南に目を転ずれば、那賀郡（現那賀郡、阿南市・海部郡）では阿南市の内原国高山古墳が1基位置している。全長63m、前方部幅25m、後円部径36m、高さ6mを測る前方後円墳である。内部主体は、結晶片岩の割石を小口積みした竪穴式石室で、長さ7.7m、幅1.3mを測る。仿製内行花文鏡、石製刀子、多数の鉄器が出土しており<sup>註(64)</sup>、4世紀末から5世紀前半と考えておきたい<sup>註(65)</sup>。同じく内行花文鏡を出土した古墳に、小松島市の前山古墳がある。勝浦郡（現徳島市・小松島・勝浦郡）に含まれる。径15mの円墳で、南に竪穴式石室、北に粘土槨の埋葬施設がある。竪穴式石室は、長さ6.6m、幅80～90cmの長大なもので、U字形の粘土床が認められる。割竹形木棺が想定され、老人男性骨、内行花文鏡、鉄剣、砥石、鉄製工具が出土している。粘土槨は、木棺の下半部を覆っており、木棺は長さ3.8m、幅50cm、高さ25cmである。これらの埋葬施設の前後関係はわからないが、4世紀末から5世紀前半の構築と考えられている<sup>註(66)</sup>。

5世紀中葉には、徳島市渋野町に渋野丸山古墳が突如出現する。全長約90m、前方部幅40m、後円部径50m、高さ9m<sup>註(67)</sup>という県下最大の前方後円墳で、草摺形埴輪が出土している<sup>註(68)</sup>。渋野丸山古墳の南側から東側にかけて周濠（周庭帯）が廻っている。こうした例は、板野郡土成町の土成丸山古墳にも認められる。周濠のある古墳はこの2基ぐらいである。土成丸山古墳は、径約30mの円墳で、幅15m前後の濠が1周している<sup>註(69)</sup>。内部主体、出土品不明であるが、渋野丸山古墳と同じように把えておきたい。しかし、この渋野丸山古墳以後、県下では前方後円墳がみられなくなる<sup>註(70)</sup>。しかも、前節でも述べたように、5世紀後半から6世紀初頭にかけての古墳が見られなくなるのである。この断絶はどういう状況を暗示しているのだろうか。

以上のように、前方後円墳を中心にして前期古墳をみていくと、2つの重要な問題に気づく。1つは、名方郡から板野郡、つまり吉野川下流域に集中して分布していることである。2つは、丹田古墳・岩神古墳を除くと、吉野川上流域には前期古墳が空白となることである。美馬郡に短冊形鉄斧を出土した古墳<sup>註(71)</sup>があるが詳細は不明である。麻植郡内にはほとんどない。麻植郡以西の一带は前期古墳の稀薄な地域といえるだろう。この対照的な2地域が古墳の地域性を考える重要な地域である。前者、つまり前期古墳の濃密な分布地域には、前節でも述べたように横穴式石室は畿内の形態を呈する。



少しの時間的断絶はあっても、古墳時代を通して、畿内の強い影響を受けているといえる。これに対して、後者、つまり前期古墳の稀薄な地域は、横穴式石室では、忌部山型石室、段ノ塚穴型石室といった特異な石室を現出させる。この石室は明らかに反畿内的形態といえる。なぜ、この地域にこうした反畿内的な石室が築造されたのであろうか。

- 註(1) 笠井新也「阿波国古墳概説」『考古学雑誌』4巻4号 大正2年  
笠井新也「阿波国美馬郡段ノ塚穴」『人類学雑誌』37巻5号 大正11年  
中井伊与太「吉野川域に於ける塚穴」『東京人類学会雑誌』8巻81号 明治25年
- 註(2) 天井部の構造と平面プランが全く違う。詳細は、拙著「徳島県下における横穴式石室の一樣相」『徳島県博物館紀要』第4集 昭和48年 を参照されたい。
- 註(3) 拙著「徳島県下における横穴式石室の一樣相」(前掲書)
- 註(4) 拙著「徳島県下における横穴式石室の一樣相—その2—」『徳島県博物館紀要』第8集 昭和52年
- 註(5) 願勝寺1号墳がT字形プランの横穴式石室として報告されている(石丸洋「徳島県願勝寺1号墳」『古代学研究』56号 昭和44年)。天井部を失っているため断定できないが、段ノ塚穴型石室の可能性が高い。
- 註(6) 2〜3基単位に築造されているが、1つの尾根や段丘端を占拠する例が少ない。数少ない例として、三島古墳群、段ノ塚穴、八幡古墳群があげられるが、いずれも2基の築造である。
- 註(7) 玄室の平面プランの胴張り度によってA型〜C型に分類した。A型は $b > c = a$ 、C型は $a = b > c$ 、B型はA型・C型の中間である( $a$ は奥壁巾、 $b$ は最大巾、 $c$ は入口巾)。また、玄門部の構造上の違いによって第1類型〜第3類型に分類した。第1類型は、玄門部を特に構成しないもの、第2類型は、玄室入口手前で仕切石程度の立石をもち、立石から玄室までの側壁を若干張り出して玄門部を構成するもの、第3類型は、太く幅広い立石のみによって玄門部とするものである(『博物館紀要』第4集)。
- 註(8) 玄室の天井部を3枚で構成し、小規模化している。出土遺物も高台のある坏があり、最終末と把握したい。
- 註(9) 例として、Iグループで考えるならば、北岡東古墳→東拝原古墳・中拝原古墳→北岡西古墳・北原古墳の順に築造されたと想定している。
- 註(10) 別名立光庵寺といい、法起寺式の伽藍配置をもつ白鳳期の寺院。『徳島県文化財調査報告書』第11集(昭和43年)・第12集(昭和44年)に報告されている。
- 註(11) 徳島県遺跡調査台帳(原簿)による。
- 註(12) 天井部を失っているが、後室長316cm・幅155cm、前室長205cm・幅100cm、羨道長56cmを測る。
- 註(13) 中井伊与太「吉野川域に於ける塚穴」(前掲書)
- 註(14) 池辺彌『和名類聚抄郷名考証』吉川弘文館 昭和41年 585頁
- 註(15) 註(14)に同じ
- 註(16) 石井町教育委員会「清成・尼寺古墳発掘調査概報」『石井町文化財調査報告書』第4集 石井町文化財保護委員会 昭和44年
- 註(17) 考古学研究班「徳島市周辺における考古学的研究」『城東郷土研究』第3号 昭和49年
- 註(18) 森浩一「和泉河内窯の須恵器編年」『世界陶磁器全集』1 河出書房 昭和33年
- 註(19) 註(16)に同じ
- 註(20) 末永雅雄・森浩一「徳島県徳島市眉山周辺の古墳調査報告」『徳島県文化財調査報告書』第9集 昭和41年
- 註(21) 森浩一「眉山周辺の古墳Ⅱ」『徳島県文化財調査報告書』第10集 昭和43年
- 註(22) 天羽利夫「徳島県下における横穴式石室の一樣相」(前掲書) 11〜12頁
- 註(23) 天羽利夫「徳島県下における横穴式石室の一樣相」(前掲書) 4頁

- 註(24) 立花博・天羽利夫『徳島市入田町内ノ御田瓦窯跡調査概報』徳島県博物館建設記念学術奨励基金運用委員会 昭和45年
- 註(25) 森浩一・白石太一郎「鳴門海峡地帯における古代漁業遺跡調査報告」『紀淡・鳴門海峡地帯における考古学調査報告』 同志社大学文学部文化学科 昭和43年
- 註(26) 鳥居龍蔵「阿波国板野郡大谷村塚穴」『東京人類学会雑誌』第3巻第24号 明治21年
- 註(27) 『鳴門市史』上巻 昭和51年
- 註(28) 註(27)に同じ
- 註(29) 『土成町史』上巻 昭和50年
- 註(30) 『阿波学原剣塚古墳』 阿南市教育委員会 昭和35年
- 註(31) 「舞子島の古墳群発見」『阿波名勝』2 大正11年
- 註(32) 岡田一郎『大里古墳』 海部郡教育研究所 昭和28年  
森浩一・白石太一郎 註(25)に同じ
- 註(33) 徳島県教育委員会立花博氏の御教示による。
- 註(34) 天羽利夫「徳島県下における横穴式石室の一樣相」(前掲書) 13~15頁
- 註(35) 天羽利夫「徳島県下における横穴式石室の一樣相」(前掲書) 16~18頁
- 註(36) 勢見山古墳(通称佐々木の抜穴)は封土の流失のため原形はとどめないが、多くの人が前方後円墳であったといい、一応ここでは前方後円墳に含めておく。
- 註(37) 三島西古墳で、前方部・後円部にそれぞれ段ノ塚穴型石室を構築している。
- 註(38) 森浩一・伊藤勇輔『徳島県三好郡三加茂町丹田古墳調査報告』 同志社大学文学部文化学科 昭和46年
- 註(39) 註(38)の報告書には可能性として述べられているが、森浩一氏は『日本古代遺跡便覧』(社会思想社、昭和48年)270頁において前方後方墳と断定しているので、それに従った。
- 註(40) 次の銘文が推定されている。「上方作鏡真大巧大吉長宜子」
- 註(41) 土盛りの円墳で、径約20mを測るが、内部主体等詳細は不明である。(註(38)の報告書5頁)
- 註(42) 末永雅雄・森浩一「徳島県徳島市眉山周辺の古墳調査報告」『徳島県文化財調査報告書』第9集 昭和41年
- 註(43) 註(42)に同じ
- 註(44) 徳島考古学研究グループの実測調査成果による。
- 註(45) 川西宏幸氏の御教示による。
- 註(46) 註(44)に同じ
- 註(47) 今年、石川重平氏らによって発見された。数値は、筆者らの略測によるもので、後日、実測調査をする計画である。
- 註(48) 「清成・尼寺古墳発掘調査概報」(前掲書)
- 註(49) 三木文雄「利包及び内容組合式石棺の研究」『石井』徳島県文化財調査報告書第5集 昭和37年
- 註(50) 森浩一「佐々木の抜穴」『日本古代遺跡便覧』(前掲書) 272頁
- 註(51) 鳥居龍蔵「阿波国二古墳ノ記」『東京人類学会報告』第2巻第17号 明治20年  
山田良三「筒形銅器考」『古代学研究』第55号 昭和44年
- 註(52) 田所市太「阿波国星河内の古墳」『考古学雑誌』第10巻第7号 大正9年
- 註(53) 三木文雄「終末期の扁平小形銅鐸について」『国学院雑誌』第78巻9号 昭和52年
- 註(54) 三木文雄「阿波国名西郡源田出土の銅鐸とその遺跡」『考古学雑誌』第36巻2号 昭和25年
- 註(55) 三木文雄「阿波国安都真出土の銅鐸とその遺跡」『考古学雑誌』第50巻4号 昭和40年
- 註(56) 村木幸雄「阿波国名西郡左右山出土の平形銅剣と其遺蹟」『考古学雑誌』第30巻3号 昭和15年
- 註(57) 沖野舜二「徳島県神山町下分東寺出土の銅剣」『考古学雑誌』第42巻1号 昭和31年  
三木文雄「徳島県神山町下分東寺出土の銅剣——補遺——」(同上書所収)
- 註(58) 天羽利夫・岡山真知子「鮎喰川下流域における弥生文化の展開——序論——」『徳島県博物館紀要』第5集 昭和49年



- 註(59) 小林勝美「矢野国府変電所緊急発掘調査概報」『徳島県文化財調査概報』1976年度 昭和53年
- 註(60) 森浩一「徳島県板野郡愛宕山古墳」『日本考古学年報』15 昭和42年 180頁
- 註(61) 後藤守一『漢式鏡』『日本考古学大系』1 大正15年
- 註(62) 立花博「遺跡調査概報——宝徳寺古墳の実測——」『徳島県博物館報』46.12 昭和46年
- 註(63) 中井伊与太「阿波国板野郡板東村の古墳」『東京人類学会雑誌』第8巻第83号 明治26年  
中井伊与太「阿波国板野郡桧村ノ古墳」『東京人類学会雑誌』第9巻101号 明治27年
- 註(64) 阿南市史編集委員会編『阿南市史』昭和42年 823～825頁
- 註(65) 註(64)では、5世紀後半としているが、出土遺物・前方後円墳の墳形・竪穴式石室の構造などから4世紀末から5世紀初頭と捉えておきたい。
- 註(66) 末永雅雄・森浩一「徳島県小松島市田浦町前山古墳調査報告」『徳島県文化財調査報告書』第6集 昭和38年
- 註(67) 徳島考古学研究グループの実測調査成果による。
- 註(68) 田中英夫「徳島市洪野古墳群の出土品」『古代学研究』第53号 昭和43年
- 註(69) 『土成町史』上巻 昭和50年
- 註(70) 例外として、三島西古墳が6世紀後半に築造されている。
- 註(71) 美馬郷土博物館蔵

## 考 察

### 1 忌部山型石室と阿波忌部

以上、史料からみた氏族分布と考古学的な諸現象をとらえてきた。ここで、今まで述べてきたことをまとめながら、本稿のねらいとする阿波忌部について考察しておきたい。

阿波忌部の分布は、史料によってみると麻殖郡、とくに和名抄にいう忌部郷および川島郷を中心にとらえることができる。しかも、古語拾遺にいう如く麻殖郡の郡名の起りも忌部にかかわりをもたせていること、また延喜式の記載の仕方からみても、ただ郡内に存在する一小集団 というのではなく、郡内においてかなりの重みをもたせている。このことから、麻殖郡内広範囲に分布していたことを思わせる。

一方、考古学的には、ほぼ麻殖郡内全域にわたって忌部山型石室が分布する。とくに忌部山古墳群、鳶ヶ巣古墳群を中心に分布する。それぞれは忌部郷、川島郷を眼下に望む位置にある。この形態の石室は突然出現し、麻殖郡一円に急速に広まっていく。他の形態の石室はほとんど採用されない。かなり強い規制がはたらいたとみられる。おそらく、この範囲を一単位でまとめえるだけの根強い基盤があったのであろう。注目すべきは、この忌部山型石室の分布領域が、律令期の麻殖郡にそのまま移行していることである。

この特異な形態の石室を営造した集団は何であったのか。筆者は、氏族分布と忌部山型石室の分布からみて、阿波におかれた忌部であろうと結論づけておく。

忌部の設置がどこまで遡りえるかは、文献学者の間では定説をみない。忌部山型石室の出現は、盛行期が6世紀半であること、初現形態がとくに存在しないことなどからせいぜい6世紀中葉とみる。今のところ6世紀初頭まで遡ることはまずないと考えている。筆者は、忌部山型石室の登場をもって忌部の設置とみる。

ここで最も重要なことは、忌部山型石室の出現が外的契機によって生み出されたのではないか、ということである。なぜなら、突然に、しかも独創的な石室を創作しえる基盤がなかったとみるからである。前期古墳の分布をみても明らかなように、現在の状況では皆無である。反論として、忌部が農民集団であるから前期古墳を営造する力をもたなかった、ということがいえよう。後期古墳になって古墳被葬者の階層は拡大される。したがってのはじめて後期古墳をつくりえたのだ、ともいえよう。この前提が正しいとすれば、地理的環境からみて、東に隣接する名方郡や阿波郡・板野郡と同様の石室を当然築造したであろう、という単純な疑問にぶつかってしまう。忌部の貢納品は国造を通して貢進されるという関係からみても、その方が自然である。しかし彼らは、現実に特異な石室をつくり出している。

外的契機を考える理由として、もう一つは段ノ塚穴型石室の存在である。段ノ塚穴型石室は、現美馬郡全域と阿波郡西部に分布する。この石室も忌部山型石室と同様、突然出現する。忌部山型石室よりは古く、6世紀前葉まで遡る可能性がある。形態的にも段ノ塚穴型石室に古式がみられる。前章で述べたように、この二つの石室はいわば兄弟関係であり、同じ系譜から分かれたものとみられる。忌

部山型石室は段ノ塚穴型石室の垂式といえる。両者は整然とすみわけている。

いずれも前期古墳の稀薄なところに分布する。あの四国最大ともいえる巨大な段ノ塚穴の石室が、はたしてこのような歴史的環境のなかで生み出しえたであろうか。段ノ塚穴の被葬者を盟主とする勢力は何なのか。残念なことに史料には現われてこない。美馬郡の氏族分布は、佐伯氏のみ知れる。この佐伯も筆者の考えでは、段ノ塚穴型石室の分布外、つまり美馬郡の西境（現三好郡池田町・三好町・三加茂町）あたりであろうと想定する。

## 2 阿波忌部の出自

段ノ塚穴型石室と忌部山型石室が同じ系譜のなかから生まれものとみて、両者を総称して“段ノ塚穴集団”と仮に呼んでおこう。阿波忌部の出自をこのなかでとらえたいと思う。

ここで段ノ塚穴集団を考えるうえで重要な示唆を与えてくれるのは、和歌山市岩橋千塚である。岩橋千塚の石室とは、早くから比較の対象となったが、細部にわたっての相違点が多く共通することは少ない。基本的には、天井を高くすることによって玄室空間を最大限に大きくする点で一致する。石棚を多く有することも数少ない共通点としてあげてよい。森浩一氏は「岩橋千塚の横穴式石室の源流は、現在はお局限して指摘することはできないにしても、北九州の古式横穴式石室をも含めての源流の地がおそらく朝鮮半島南部にあると考えられる。」と述べ<sup>註(1)</sup>、また最近では「東アジア全体で比較したら高句麗にもっていかざるを得ない」と高句麗との関連を指摘している<sup>註(2)</sup>。

この岩橋型式の石室は、5世紀末から6世紀初頭に出現する。岩橋千塚の形成は5世紀になってからといわれるが、注目すべきはそれ以前の4世紀代の前期古墳がみられないことである。しかも5世紀代の古墳にしても、幾内の前期古墳とは趣を異にしているという<sup>註(3)</sup>。紀ノ川を遡れば大和に通じる好位置にありながら、このような現象は岩橋千塚をみる場合重要なことである。あたかも、段ノ塚穴型石室や忌部山型石室出現前の様相と一致する。

岩橋千塚の営造集団の主体は紀国造とされる。この岩橋千塚の一角に紀伊忌部の分布が含まれることも興味ある事実である。『古語拾遺』は紀伊忌部の居るところは御木、鹿香の二郷とする。園田香融氏は、御木郷は和歌山市上三毛、下三毛に、鹿香郷は同市黒田に比定する。また『和名抄』にいう忌部郷は同市井辺を比定する<sup>註(4)</sup>。すなわち、紀伊忌部の分布は日前宮周辺とみてよい。

ここでみられる岩橋千塚集団のなかの紀伊忌部と、段ノ塚穴集団における阿波忌部のあり方はきわめて共通する。段ノ塚穴型石室を営造した集団は国造級の勢力をもっていたことは、十分考えられる。しかし、粟国造は板野郡や名方郡に本拠地をもつ栗凡直であったと考えられることから、粟国造であったはずはない。このことから、阿波三国説など生じてくるのだが、……。この集団は、県下でも一番早く寺院の営造に着手する。大化後は、おそらく国造、郡司などを職掌としたであろう。だが、律令期になっても史料にはその名をとどめない。

岩橋千塚とのあり方からみて、紀氏的な集団といえなくもない。河上邦彦氏は、石棚を有する古墳の大半は紀氏あるいは同族の墳墓ではないかと考えるのである<sup>註(5)</sup>。阿波における紀氏の分布は、『続日本紀』慶雲元年6月の条に出てくる『木連理』と延喜2年の『田上郷戸籍』にみえる「木部」の2

例だけである（第2章第1・2表参照）。田上郷戸籍にみるかぎり、板野郡など東部には稀薄であったことが想定できる。この2例に共通することは、「木」であって『紀』を書かないことである。岸俊男氏は、「紀氏の用字は国号としての紀伊が木に代って用いられてから、木→紀伊→と変化したのではなかろうか。」とみている<sup>註(6)</sup>。坂元義種氏は「木→紀→紀伊あるいは木・紀→紀伊」とみる<sup>註(7)</sup>。いずれにしても、阿波の場合古い用字といえる。木氏が美馬郡にいた確証はないが、逆にその可能性も否定できない。

紀氏が朝鮮と特殊な関係にあったらしいことは、岸氏も指摘するとおりである<sup>註(8)</sup>。最近では紀氏を渡来氏族とみる金達寿氏の説もある<sup>註(9)</sup>。段ノ塚穴集団もその成立経緯からみると、岩橋千塚の場合と同じである。段ノ塚穴集団は渡来集団と何らかのかかわりあいをもち、美馬郡や麻殖郡の開拓にあたったとみるのが筆者の見方である。

### 3 今 後 の 課 題

阿波忌部や紀伊忌部について共通していえることは、いずれも特徴ある石室を築造していることである。讃岐忌部についてはまだ何も手がかりを得ていない。この三つの地方忌部はきわめて近接している。根底には共通した何かが潜んでいるのではないだろうか。

本稿で述べてきた見解は、さらに考古学的方法で究明できるものと確信している。それは胴張りプランの採用と伝播、また複室構造石室の採用と伝播などから、段ノ塚穴型石室や忌部山型石室の系譜をたどれるものと大方の見通しをたてている。近く稿を改めて、批判を仰ぎたいことを記して本稿の結びとしたい。

註(1) 末永雅雄編『岩橋千塚』 関西大学文学部考古学研究紀要第二冊 昭和42年 427頁

註(2) 森浩一ほか「紀氏とその遺跡」『日本の渡来文化』 中央公論社 昭和50年 141頁

註(3) 『岩橋千塚』 前掲書 430頁

註(4) 同上書 459頁

註(5) 河上邦彦「石棚を有する古墳について」『平群・三里古墳』 奈良県史跡名勝天然記念物調査報告第33冊 昭和52年 135頁

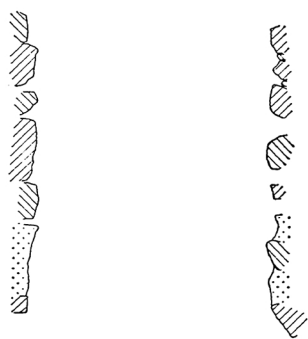
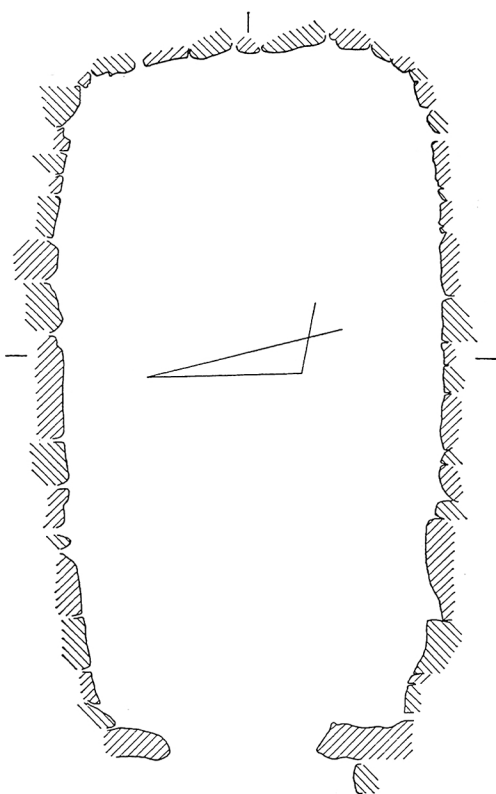
註(6) 岸俊男「紀氏に関する一試考」『近畿古文化論攷』 吉川弘文館 昭和51年 422頁

註(7) 坂元義種ほか「紀氏とその遺跡」 前掲書 122頁

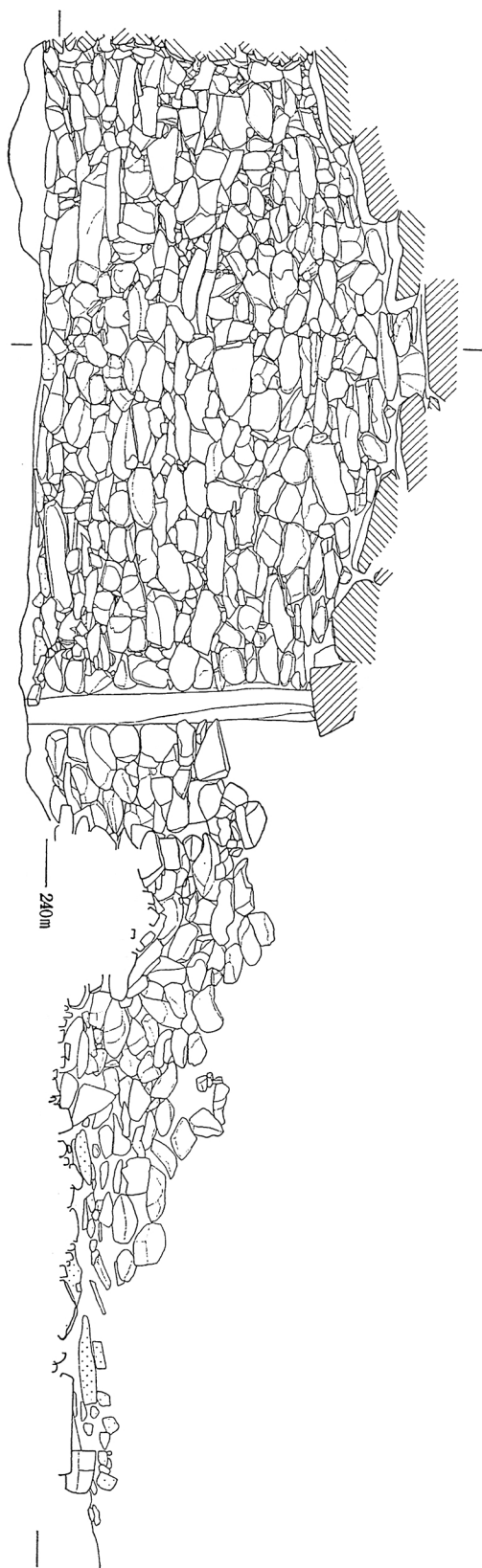
註(8) 岸俊男「紀氏に関する一試考」 前掲書 421頁

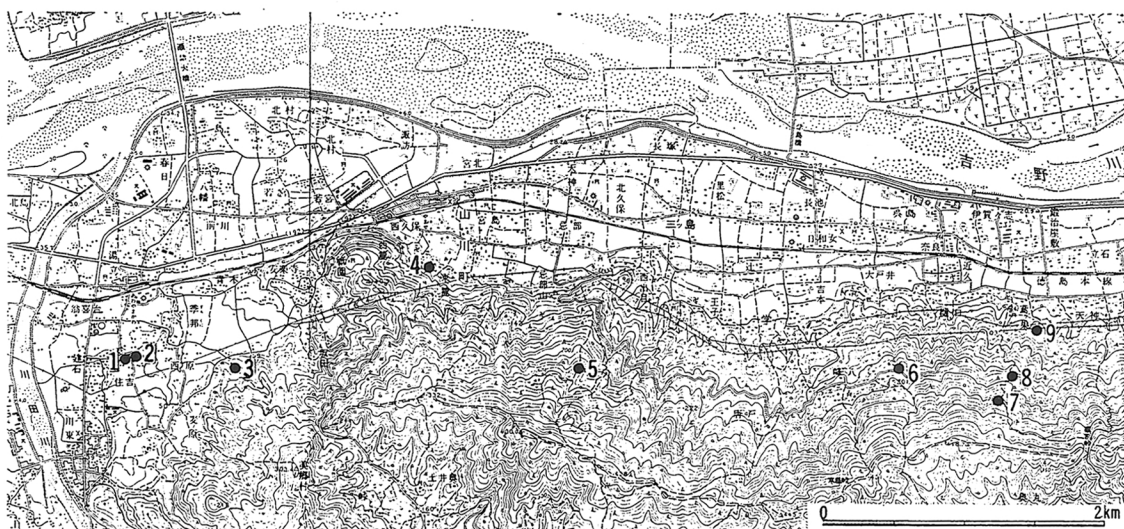
註(9) 金達寿ほか「紀氏とその遺跡」 前掲書

追記 忌部山古墳群第3次発掘調査は、昭和53年8月実施する予定でいる。忌部山古墳群発掘調査の概要は53年度に行なう予定でいる。本稿で詳述できなかったが、近く刊行する報告書に委ねたい。巻末の忌部山2号墳実測図もモデルとして呈示したため、奥壁など省略したことをお許しいただきたい。



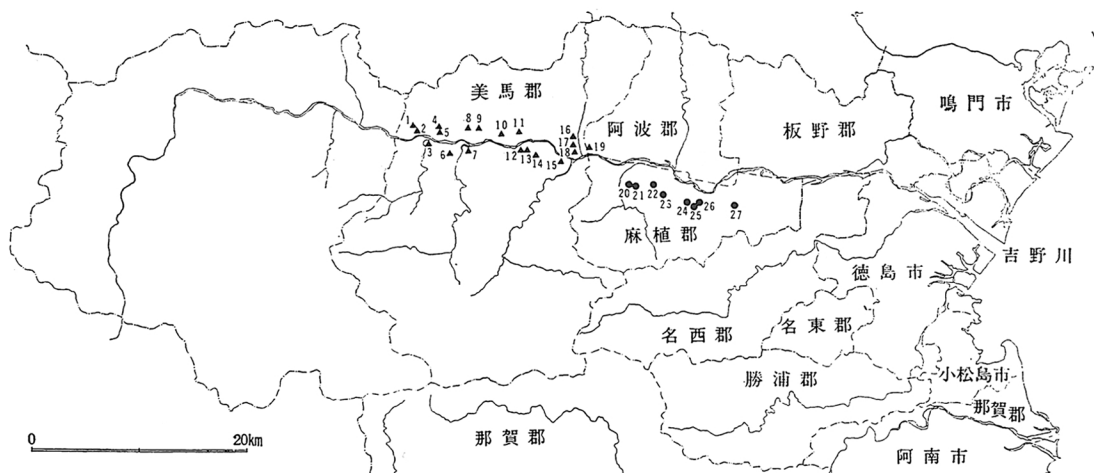
第1図 忌部山2号墳石室実測図





第2図 忌部山古墳群と周辺の古墳（2万5千分の1『脇町』『川島』）

- |         |             |             |         |          |
|---------|-------------|-------------|---------|----------|
| 1 無縁大師塚 | 2 西ノ原古墳     | 3 境谷古墳      | 4 金勝寺古墳 | 5 忌部山古墳群 |
| 6 峰八古墳群 | 7 鷺ヶ巣古墳群(A) | 8 鷺ヶ巣古墳群(B) | 9 石風呂古墳 |          |



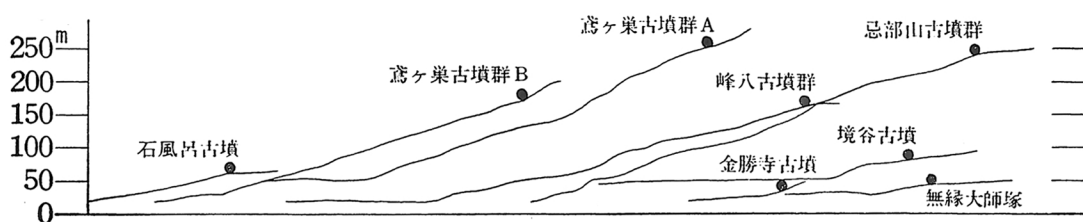
第3図 段ノ塚穴型石室と忌部山型石室分布図

▲ 段ノ塚穴型石室

- 1 大國魂古墳
- 2 八幡古墳群(2)
- 3 小野天神古墳
- 4 海原古墳
- 5 荒川古墳
- 6 西山古墳
- 7 江ノ脇古墳

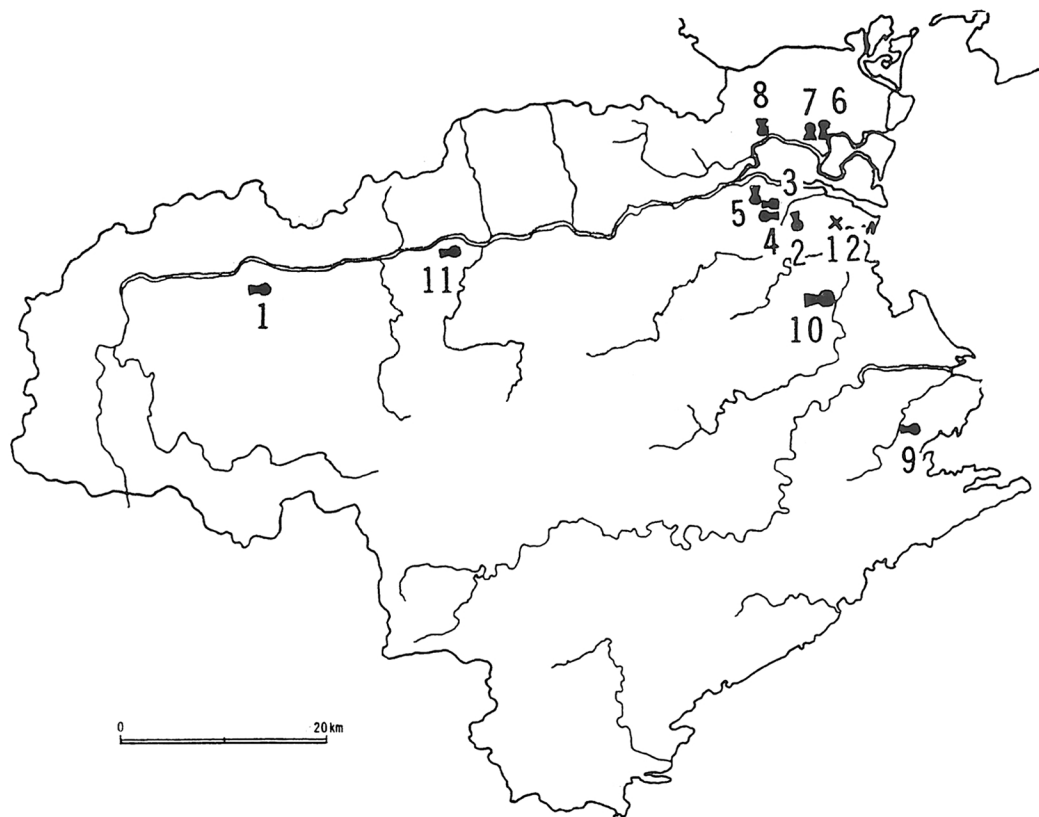
● 忌部山型石室

- |              |          |              |           |
|--------------|----------|--------------|-----------|
| 8 真鍋塚        | 15 戎古墳   | 20 無縁大師塚     | 27 療養所古墳  |
| 9 段ノ塚穴(2)    | 16 尾山古墳  | 21 境谷古墳      | 西宮古墳      |
| 10 野村八幡古墳    | 17 北原古墳  | 22 金勝寺古墳     |           |
| 11 国中古墳      | 18 中拝原古墳 | 23 忌部山古墳群(5) |           |
| 12 三島西古墳群(2) | 19 東拝原古墳 | 24 峰八古墳群(3)  |           |
| 13 三島東古墳     | 20 北岡東古墳 | 25 鷺ヶ巣古墳群(5) |           |
| 14 三谷古墳      | 21 北岡西古墳 | 26 石風呂古墳     | (数字) は古墳数 |



第4図 忌部山型石室垂直分布図

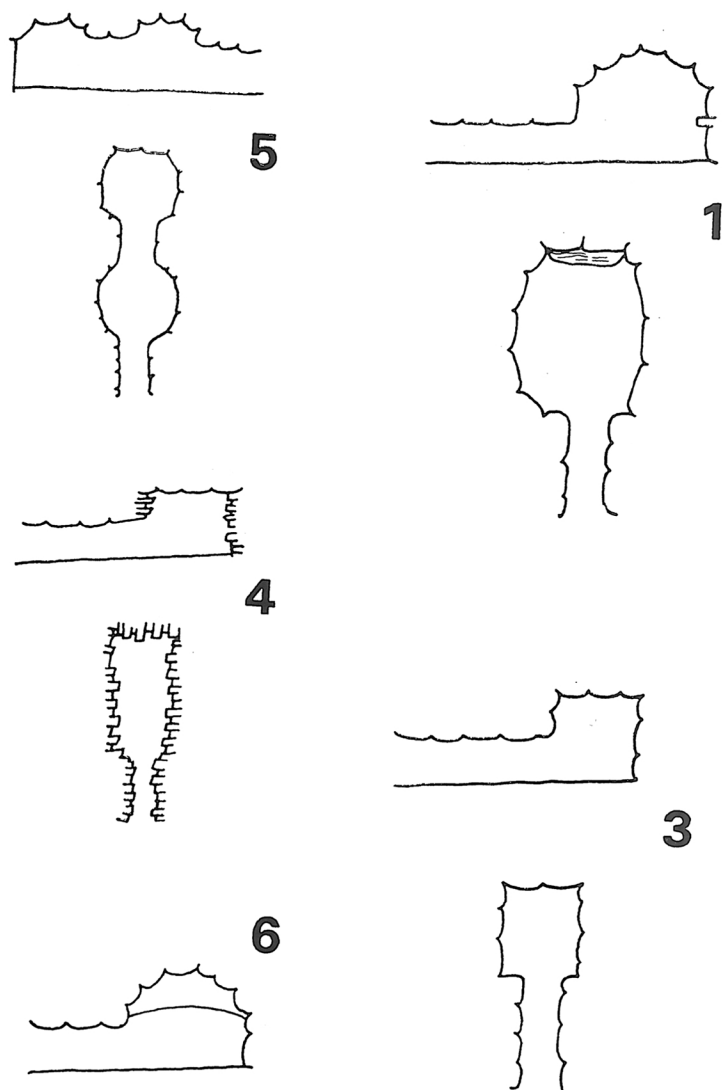
（吉野川に直交して断面図を作成し、各古墳が重複しないように断面図をずらした。高さは海拔。）



第5図 前方後円（方）墳分布図

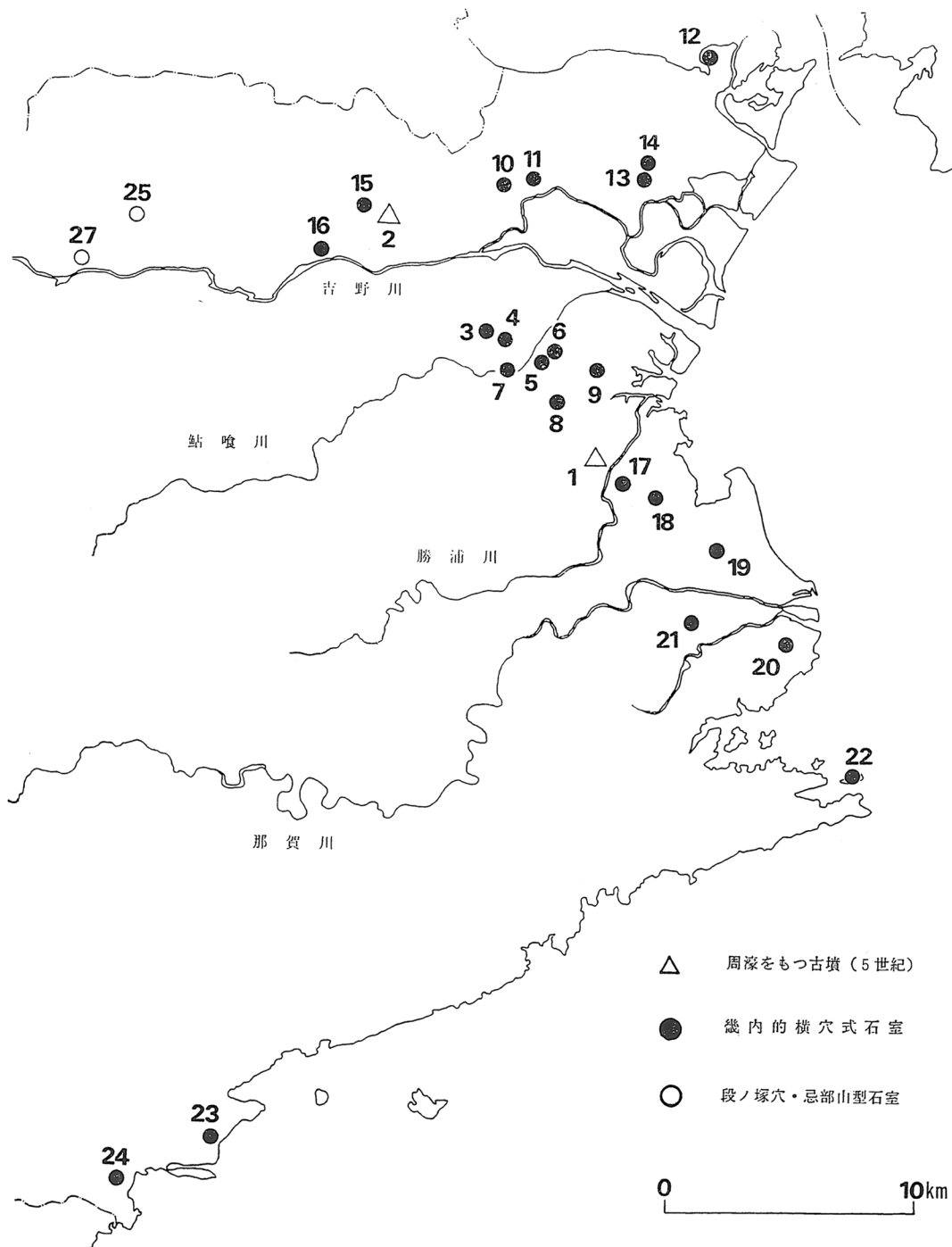
- |          |           |          |          |
|----------|-----------|----------|----------|
| 1…丹田古墳   | 2…八人塚古墳   | 3…奥谷古墳   | 4…宮谷古墳   |
| 5…山ノ神古墳  | 6…宝幢寺古墳   | 7…天河別古墳  | 8…愛宕山古墳  |
| 9…内原国高古墳 | 10…渋野丸山古墳 | 11…三島西古墳 | 12…勢見山古墳 |
- （11のみ後期古墳 12は可能性ある古墳）





第6図 中井伊与太報文にみる横穴式石室の形態  
『東京人類学会雑誌』81号 106頁より転載 明治25年発行

中井報文「吉野川域に於ける塚穴」のなかで横穴式石室を6類に分けている。1類は天井穹形で奥壁に棚をもち、やや円形のもの。2類は1類の棚のないもの。3類は壁を大なる板石で築き、天井平坦で長方形のもの。4類は割石で天井平坦、長方形のもの。5類は「穹形をなせる二室の相連続せるもの。阿波郡勝名村にある塚穴これなり」。6類は「実に奇なるものにして……、其室二重に作られたるものにて上室へ上ることを得るもの。美馬郡重清村に存在せる塚穴なり」。1、2、5、6類は記述内容からみて段ノ塚穴型石室。5類は複室構造の石室であることはまちがいない。古墳は消滅?。6類は不明。



第7図 徳島県東部の主要後期古墳

- |                  |              |             |            |
|------------------|--------------|-------------|------------|
| 1. 洪野丸山古墳(5世紀前半) | 8. 樋口古墳群     | 15. 向山古墳群   | 22. 舞子島古墳群 |
| 2. 土成丸山古墳(5世紀?)  | 9. 恵解山古墳群    | 16. 穴薬師古墳   | 23. 大里古墳   |
| 3. 尼寺古墳群         | 10. 岡ノ宮神社古墳群 | 17. 前山古墳群   | 24. 穴喰古墳   |
| 4. 矢野古墳群         | 11. 阿王塚古墳    | 18. 弁慶の岩窟古墳 | 25. 正広の塚   |
| 5. うばのふところ古墳     | 12. 日出古墳群    | 19. 観音山古墳   | 26. 忌部山古墳群 |
| 6. 穴不動古墳         | 13. 穴観音古墳    | 20. 皇子山古墳群  | 27. 北岡古墳群  |
| 7. 内ノ御田古墳        | 14. 葛城神社古墳   | 21. 八鋒山古墳群  |            |